

表紙準備中

東方三界黃龍伝

『我が青春の崑崙』

小龍

目次

一章 西方軍大将との出逢い

- | | | |
|---|-----------|----|
| 1 | 崑崙の防衛隊長 | 6 |
| 2 | 陽輝という男 | 15 |
| 3 | 九玄の過去 | 24 |
| 4 | トラブル・メーカー | 38 |
| 5 | 城壁の街 | 46 |
| 6 | 裏切りの清算 | 56 |

二章 将神との出逢い

- | | | |
|---|---------|----|
| 1 | 九玄の杞憂 | 65 |
| 2 | 不可解な将神 | 73 |
| 3 | 龍脈のはじまり | 79 |
| 4 | 緑麗の覚悟 | 93 |

5 参戦
6 嗚咽

103 110

三章 真武君との出逢い

1 黒帝玄武佑君

118

2 奇妙な関係

125

3 かく語りき

133

4 七星剣と共に

138

5 絶望の果て（終）

144

主な登場人物

九天玄女きゅうてんげんじょ ……見かけは二十代後半くらいの仙人。崑崙防衛軍隊長。
敖閏ごうじゆん ……西海龍王。自称「愛の狩人」。フェミニストな美中年。
陽輝ようき ……天界西方軍大将。不良を絵に描いたような大将。
緑麗りよくれい ……元将神。金髪、緑青の瞳という異質な姿の美女。
真武君しんぶくん ……四方将神の一人だったが、仙界に逗留することに。

一章 西方軍大将との出逢い

1 崑崙の防衛隊長

夜の山中だった――。

そこかしこに焚き火が設置され、思い思いに寛ぐ戦士たちが居る。

数日の激戦を潜り抜け、取り敢えず今回の最大のミッションは終わった。

いまは様子を見ながらの後退なので、私も多少気を楽にして、自分の寝所に戻る途中だった。

「あれはあまりに高嶺の花でしょー？」

そんな笑い声を交えた男たちの会話がふと耳に入ったので、思わず足を止めた。

「俺は一晩だけでもお相手願いたい！」

「あんな美女を前にしたら、キンチョーしちゃって勃つモンも勃たねえって」

誰のことを言ってるのか、といえば、言わずもなだらう。こんなのは言われ慣れている。

野営地でこんな風に下ネタ話が盛り上がるのはいつものことで、そのネタにされるのは決していい気分ではないが、女として『ネタにもされない』のはもつといい気分じゃないので、怒り半分、興味半分でその猥談を聞いていた。

草むらからそつと見ると、予想通りの面子が酒盛りをしている。

本人に聞こえているのに気付いてないとしても、こんな言いたい放題な噂話をする命知らずは、我が部隊にはさすがに居ない。彼らはい先日、途中から戦列に加わった天界軍の部隊である。

今回は天界との境界線付近での戦闘になりそうだったので、面倒になつては困る、と一応連絡だけは入れておいたのだ。

しかし、通達を入れた西方軍大将は、やけにあつさり了解し、自ら一部隊を率いて参戦してくれた。

基本的に天界側は崑崙こんろん（闡教せんきょう）と金熬島きんごうとう（截教せつきょう）の争いに関して不干渉の

立場を取っているが、宗主側としての武威は示しておきたいということなのだろ

う。

「いやあ、でも、さすがに『崑崙一の美女』と言われるだけあるよな。参戦して良かったつすよね、大将」

副官らしき若い男が言う。

「なんだ、おめーら、あの隊長サンを見に来たのかよ」

応じる大将は髪を橙色に染めている男だ。こうしているとゴロツキにしか見えない。

「それ以外のなんだってんです？ 仙界内の勢力争いに借り出されるなんて、ホントなら願い下げじゃないすか」

「バーカ、あのまま静観してみる。つうてんきようしゅ 通天教主つうてんきようしゅ の思うツボだぜ」

「とか言っちゃって、ホントは大将だって、噂の美人隊長を見てみたかったんでしょ？」

「もう、あのナイスバディーは男の夢の結晶つすよね！」

部下たちが好き放題言っているそばで、大将の男は焚き火の前で悠然と横になつて酒を呑んでいる。

「大将は興味ないんすか？」

「いや、そういうワケでもねえが……。確かにイイ女だし、いい身体してるが、ありやきつと上げ底だぜ」

（誰が上げ底だ!!）

「ええ！ そうなんすか!？」

「まあ、確かに、あんだだけ胸ばつか目立つと、並の男は怯みますからねえ」

（デカく見せて敵の目をそこに引きつけようってか!? そんなセコイ真似するかっての!）

思わず出て行こうとしたが、やめた。天界軍の連中と事を起こしてもしようがない。

（全く、男ってやつは……）

確かにこの容貌で得をしてきたこともあるが、『女を武器にしてる』なんて思われるのは心外だ。沸々とした怒りを胸に、寢所に戻った。

あの西方軍大将の陽輝ようきという男は、見た目に反して鮮やかな統率力を持っている。それはこの数日間の戦闘でも実証済みだ。

最初に会ったときは、エリートにしかねないという軍大将にこんな無頼漢も居るのかと思っただけだが、兵たちからは絶大な人気があるらしい。

それも、なんとなく分かるような気がしていたが――。

上げ底発言は、しっかり覚えておくぞ、陽輝大将!!!

私が崑崙の武力を束ねる立場になってしまったのは、単なる偶然とタイミングだ。別に実力でのし上がったわけでも、野望があつたわけでもない。

そもそも、王都の大学寮で周囲に煙たがられながらも学問に没頭していた頃は、仙人になるつもりなんて毛頭なかったのだ。それが、いまや人間界とは隔離されたこの世界で、争いの只中に身を置いている。

昔の知り合いはとうに死に絶えただろう。いったいあれから何年経っているのやら。仙籍に名を連ねるようになってからは年月を数えることもなくなった。

「大活躍だったみたいだねえ、九玄きゅうげん チャン」

崑崙の前哨基地を兼ねている街に戻ってきて数日、仮設本部の執務室で、当然

のように私の椅子に座っているのは、西海龍王敖閏ごうじゅん だった。

本来なら、スタッフ全員で丁重に出迎えて、酒宴の一つでも催さなければなら
ないような身分の男だが、今回は本人の希望によるお忍びだ。

そして、この龍王のお忍び訪問に、政治的な意味はほとんどない。

「でもさう、ちよつと考えなおさない？ 確かに僕は君が仙姑せんこ（※女性の仙人）
になるように勧めた身だけど、戦場の花にしたつもりはないんだけどね」

「閏様、情事にいらつしやったんですか、それとも、防衛隊長を辞めろという説
得に？」

「両方♪」

「……なら、前者だけ、承諾します」

この人には出逢った当初から相当に口説かれた。

それまで、こんなに熱心に（しかも不屈の精神で）口説いてきた男は居なかつ
たので、もう最後は根負けした。

といっても、この関係は所謂不倫だし、大人の関係だし、私もかなり割り切つ
ている。

この龍王が私を大事にしてくれているのは分かるが、それは恋情ではない。彼にとって、女性とは単純に慈しんで愛するものなのだろう。

座っている彼に跨またがるよう乗り上げて、久しぶりの口付けに酔う。

禁欲に行軍していると、確かに男に飢えそうになることはある。

しかし、女は男ほど切実じゃないから涼しい顔もしていられるのだ。

「今回の遠征は、かなり長丁場だったね？」

睦言の延長のようにささやく。

「ええ、まあ」

「誰にもチョツカイ出されなかった？」

これは嫉妬というよりも、保護者的感情から来る『心配』なのだ。

「私が、させませんから……」

「まだ、君を下にできる男は出現しないの？」

フツツと笑う西海龍王は、私の性癖をよく知っていて、その上で私のやり方に付き合ってくれる。

この龍王は、地位や名声は言うに及ばず、男としてもかなり魅力的な人物では

あるが、それでも私はこの人に『乗られる』のは遠慮したい。

徹底的にフェミニストな西海龍王は、それ故、私をこうして好きにさせてくれるのだが、彼は『君を下にできる男が現れたら僕は身を引くよ』と言っている。

「僕はさ、九玄チャン、この綺麗な身体が傷つくのはとっても悲しいよ」

彼が、私の衣服を脱がせながら、言う。

まだその話が続いていたのか、と思った。

「でも、君がもう『この道』を選んできましたのなら、誰にも説得はできないんだろうな」

私は積極的に戦場へ出向く事を選んだわけでもないが、確かに誰かに辞めろと言われて辞められるようなものでもない。

ただ、女はやはり弱いものなのだ。

男たちに翻弄されて、人生を狂わされた女を、私は何人も見てきた。

私はあなりたくないだけなのかもしれない。

2 陽輝という男

長年続いている金熬島の連中との小競り合いは、もはや日常茶飯事だった。

しかし、ここ数年、その『小競り合い』は各地でかなりの火の手となつてい
る。

通天教主の思惑としては、一気にケリを着けたいのだろうが、あそこも一枚岩
ではないので、それも難しいようだった。

そして、我々、崑崙側の建前としては『防衛軍』という名称で分かるように、
あくまでも専守防衛なので、こちらから侵略戦争を仕掛けるわけにはいかない。
だから、この不毛な争いはなかなか終わる気配がない。

「隊長、備蓄の兵糧はあと一ヶ月つてところですが、どうします？」
部下の一人が報告書を提出するついでに聞いてきた。

「あまりこの街に長居してもいいことはないからな。とりあえず第一部隊以外は
解散させてもいいだろう」

城壁を持った要塞都市とはいえ、ここは基本的には商人の街だ。普通の人間にはたどり着けないが、たまにシルクロードで迷った旅人が流れ着くこともあって、街には種々雑多な人間が暮らしている。

「了解しました。そのように手配します。やはり我々は歓迎されていないんですね？」

「いずこも同じだろうが……。平和に暮らしている者たちは武器を持った連中を好きにはならんだろう」

その『平和』を我々が守ってやっているというお仕着せをするつもりはないが、武器を持つ者と持たざる者の間に大きな隔たりがあるのも事実だ。

「西方軍のお歴々はまだ帰る気ないみたいですが」

「なんだって？」

部隊を解散させた陽輝大将は、数人の部下と共になぜかこの街に逗留しているという。

そして、そのことに妙に嫌な予感がしたのと同時に、街一番の大きな妓楼で刃傷沙汰があったという通報が入った。

現場に赴くと、案の定、かの軍大将が芸妓の膝の上で酒を呑んでいる。

「なにをしておられる、陽輝大将——」

呆れ果てた口調で、見下ろしながら言ったのに対し、この男はちっとも悪びれもせず、片手をあげた。

「よお、九玄姐さん」

部屋は修羅場の跡、といった感じで、酒瓶は割れているし、数人の男が倒れたままになっている。

軍大将を膝の上に乗せたまま、動じてないこの芸妓も大したものだが、周囲のスタッフは青ざめた顔をして遠巻きに見守っていた。

よつぽど凄惨な一幕があったのだろう。

「いや、なに、その男がな、この姐さんの馴染み客らしいんだが、俺が二日程独占してたら、愠気起こして、喧嘩ふっかけてきやがったのよ」

「……それで？」

「まあ、そんだけの話さ。丁度いいから、こいつら、ブタバコにぶち込んでおいとくれや。妓楼ではご法度の刀剣振り回してきやがったからな」

「……」

なんともまあ、呆れてものも言えん。

とりあえず、引き連れてきた部下たちに倒れている者を捕縛させたが、もしかしてこの男はこの人数を一人でやったのか？ しかも、恐らく素手で。

「陽輝大将……、天界軍の将たる者がこんな醜聞を起こしているのか？」

「ああ、大丈夫、大丈夫。俺の場合、喧嘩沙汰は日常すぎてスキヤンダルにもならねえから」

「そういう問題じゃないだろう。ここは、普段、貴方が出入りしている帝都の場末とはわけが……」

くどくど文句を言おうとしたら、あっさり返される。

「都合が悪いつてんなら、九玄姐さんの方でテキトーに処理しておいてくれ」

「そんな義理はないような気はするが？」

「つれないこと言うなよ。それぐらいの貸しは作ったつもりなんだがな」

「……」

確かに、先のミッションは西方軍の参戦あってこそその勝利だった。それには感

謝している。

しかし、あの奇跡的な手腕を見せた大将は、戦場以外ではとんだ疫病神だと気が付いた。

「今日のことは不問にしよう。しかし、この街に逗留するのなら、くれぐれも騒ぎは起こさないでくれ」

そう言って、スツキリしないまま妓楼を後にした。

その後も、何度か街中で陽輝大将に出くわした。

ほとんど単独でブラブラしているようで、傍目には遊んでるようにはしか見えな
い。

その日も、昼前という時間、通りのカフェでいま起きたというような顔をして欠伸をしていたこの男と鉢合わせ、仕方なくコーヒーを奢る羽目になった（というか、タカられたのだ！）。

しかも、一晚中艶事に耽ってました、みたいならしない格好で、堅気の女な

ら顔をそむけそうだ。

この男には自分の地位に対する自覚ってものが足りなさ過ぎる。

四方軍の大將といえば、天帝陛下にも普通に拝謁できる身分だし、相当の実績や教養がないとなれないはずなのだが、この男ときたら、ボサボサの橙色の髪で革ジャンを羽織り、アーマライトを無造作に背負っている。安い賃金で戦場を渡り歩く傭兵にしか見えない。

外見を繕えとは言わないが、せめて、略装の軍服くらい着てくれ。

ふと、そう言えば、この男は西海龍王の後任ということになるな、と気付いた。

昔は四海龍王が四方軍の大將を兼任するのが習わしでもあったので、あの西海龍王も軍服を着ていた時代があった。が、時代の流れというか、天界側の政策の変更もあったのか、いま兼任しているのは東だけらしい。

「少しは、前任を見習ってもいいのでは？」

「あ？ ……ああ、あの愉快的オッサンな。そいや、姐さんの情夫だっけ？」
その言い方にカチンと来た。

長年の戦友同士の会話ならともかく、わざわざそんな言葉を使わなかったって他に言いようがあるだろうが。

しかし、それについて感想を漏らすのも馬鹿らしかったので、無視した。

「いつまでこの街に居るつもりだ？」

「いやあ、なんか居心地がいいんで、ずるずると」

「……」

全く、なんていい加減な男だ。

戦場で見せていたあの眼光の鋭さはどこに行った。

こんな昼行灯に用はない——と、なぜか怒りにも似た感情を覚える。

しかし、二杯目のコーヒを飲みながら、陽輝大将が欠伸の続きのように言った言葉には、多少の緊張感があつた。

「姐さん、アンタ、見て見ぬフリをしてきてるってわけか？」

「なんのことだ」

「俺がこの街でなにしてるのか、ってことさ」

「妓楼の見学だろ？」

と苦笑して見せると、向こうも肩をすくめた。

「ま、それならそれでいいんだが。俺たちだって、いつ敵同士になるか分かんねえからな。あまり恩を売っても返せないぜ？」

「……なるほど」

やはり、崑崙か金熬島の情勢を探っているんだな。

私は自分の判断に落胆せずに済んだようだ。

「別に恩を売ってるつもりはない。私とて宮使えの身だ。上からの命令に仕方なく従うこともある」

「そうかい。そう言ってくれるんなら、俺も気が楽だ。……実を言うとな、『仕事』はほぼ終わってる。もうそろそろ引き上げてもいいんだが……」

「……?」

「まだ一つ、気になることがあるんで、それを確かめてから帝都に戻っても遅くはない」

「気になること……?」

「いや、こっちのことだ。じゃあな、ご馳走さん」

不覚にも、このときは彼の言っていることが分からなかった。

3 九玄の過去

私が生まれ育ったのは、中国大陸の西にある辺境の貧しい村で、いつも戦乱のとばっちりを受けているようなところだった。

土地そのものはそんなに悪くはない、ごく普通の山岳地帯なのだが、数年ごとに代わる領主の財政事情で税が重く、村人たちは明日をも知れぬ生活を余儀なくされていた。

幼少期は私もその村で羊を追ったりしていたが、物心ついてしばらくしてから王都に行かされることになった。それが所謂『口減らしのための身売り』であるということとは理解していた。

煌びやかな着物を着た女たちが嬌声を上げる王都の妓楼で、数年、下働きをした。

しかし、運が良かったのか悪かったのか、その妓楼は戦火に消えた。

珍しくもない話だ。乱世と言われた時代、大国といえど為政者が変わっただけ

ですぐに滅び、新興勢力が取って代わる。

私は路頭に迷うことになったが、十四歳の少女にとってそれは死を意味する。

焼け野原になった都で物盗りなどもしたが、すぐに餓死寸前のボロ切れのようになつて、巡回していた役人に死体と間違われて、廃棄所に連れて行かれそうにもなつた。

その役人に、街外れの道観がまだ残っていると知らされた。

生き残つた被災者たちがそこに集まつていて、まだ余力のある大人たちが、老人や子供の世話をしているという。

私もその中に加えてもらつて、なんとか命をつなぐことができたのだが、そこで出会つた一人の風変わりな老人が、私の人生を変えた。

老人は托鉢僧のような格好をしていたが、歳のせいで目が悪くなっており、読み書きができなくなつていた。郷里の家族に無事を知らせたいが、自分は手紙が書けない、と言うので代わりに書いてやったのだ。

私は、世話をしていた妓楼の姉さんたちから気まぐれに与えられた書物を読んでいたせいで、少しは読み書きができた。

それ以来、しばらくはその道観で賄いの手伝いなどをしながら、他の者からも代書を頼まれたりして、よく言えば便利屋のようなことをして過ごした。

老人は、私の知らない色んなことを教えてくれた。

どこかの王宮で家庭教師をしていたことがある、と言っていたが、元は教師ではなく官僚だったそうだ。

私の飲み込みが早かったのか、彼の教え方が上手だったのか、数年のうちに私は大学寮に入れるほどになった。

しかし、老人は、自分で教えておきながら、私が学問の面白さに没頭する頃になると、難しい顔をした。

「世の中、知らなくていいこともある。知らなければならぬこともある。しかし、それを知る側の人間が取捨選択することはできない」

「なにも知らない方が幸せ、という意味か？」

「いや、知って後悔することもある、という覚悟も必要だということじゃ」

「……」

「お前さんには学問などやらんでも見た目の天賦というものもある。どこかの金

持ちに嫁いだ方が幸せかもしれんぞ？」

その頃にはもう王都は復旧しており、それなりに活気のある商家が大通りに軒を連ねていた。

そういった大店の主が、私を養女にしたいとか、息子の嫁にしたい、と言ってくることもあったので、老人はその申し出を受けるように私に勧めてきたのだ。

まだ一般的な婚期には早かったが、このまま道観で下働きを続けるよりは、確かに楽はできただろう。

しかし、私は、裕福な家庭に入るよりも、世の中の色々なことを知りたいという欲求の方が強かったので、学校に行かせて欲しいと願い出た。

老人はあまりいい顔をしなかったが、それでも苦心して金銭を集め、私を王都一の大学寮に行かせてくれた。

そして、彼は私が大学寮に入ったのを見届けるかのようにして、その後すぐ病死した。

その後は、女が学問をするな、という周囲の冷たい視線を浴びながらも、暫くは平穩に暮らした。

近付いてくる同級の男たちは、適当に遊んで捨てた。

どうせ、こいつらは妓楼に来ていた醜い笑い方をする男たちと同じだ、と思った。

あの客の中にも、たまに普通の情を持った男も居たが、こんな刹那的な世の中、男は女を食い物にすることしか考えていない。

私の噂を聞きつけてやってきた王宮の使いも居て、後宮に入るように薦めてきたが、男はもう経験済みだと言ったら、すごすごと帰っていった。

学問だけでは身を守れないと気付いたのは、再び、王都が異民族の進撃にあつたときだ。

全てが焼き払われ、赤黒く燃える空の下で、人の無力というものを漠然と感じた。

何度、こんな絶望感を味わえばいいのだろう。

道端で女を犯す男を殴り殺したときは、もう、なにもかもが終わった、と思っ

た。

助けた女は半分正気ではなかったが、私も正気ではなかったはずだ。

落ちていたその男の剣を拾って、自分の武器とし、逃げるように王都を去った。

そのまま、失意の下に郷里へ足を向けた。自分を捨てた家族には会いたくなく、かつたが、他に行く場所もすべきことも分からず、ただ血塗れになったこの手だけが、唯一私を正気にした。

「迷ったら仙境にでも行け」

老人が、そんなことを言っていたのをふと思い出した。

それは彼の冗談だったのだろうが、もう、私にはその方法しか残っていない気がした。

私にとって仙境というのは、『天国』という意味に思えたのだ。

死してこの罪が許されるのなら、それしかない、と。

あの名も知らない醜悪な男を殺したことを後悔はしていないが、この罪の意識を背負ったまま、なに食わぬ顔でどこかの村で生きていくことはできない、と

思った。

ならば、あとは神仙に委ねよう——。

芸妓にも学士にも成り損ねた女の哀れな魂など、救ってくれる者が居るのかどうかも分からないが、地が忘れた憐憫の情を、天が持つのなら、まだこの世界は存続する価値があるのかもしれない——。

そんなことを思いながら、近くの海に身を沈めた。

* * *

「おはよう、九玄ちゃん♪」

「……」

そういえば、最初に逢ったときもこの男は、こんな顔をして私を覗き込んでいた。

そのとき、私はなんと言ったのだったか——。

身投げに失敗してどこかのお大尽に拾われたのか、と思ったのは覚えている。

煌びやかな宮殿だったのでそう思ったのだが、そこが『琥珀宮』こはくきゆうで、私を助けてくれたのが西海に住まう龍王本人だったとは、夢にも思わなかった。

「フフ……」

「どうしたの？ いい夢でも見てた？」

「いえ……、閨様は変わらないな、と思つて。私は、だいぶ様変わりしたような気がしますが」

「そうだねえ……、変わったというか、ますますイイ女にはなつたけどね」

「見た目は磨けば何とかかなりますよ……」

ガウンを羽織つてベッドを抜け出し、朝の支度をするべく台所に向かった。駐屯先では、崑崙の屋敷のように甲斐甲斐しく世話をする者も居ないので、コーヒーを淹れるのも自分でする。

しかし、台所に立つ私の腰を引き寄せる龍王様は、まだ昨夜の余韻を引きずつているらしい。

愛の狩人は朝から濃いな……。

「」

久しぶりにその名前を呼ばれたな、と思った。

出逢った当初、この龍王は私のことをそう呼んでいた。

「もしかして、さつきもそう呼んでました？」

「うん？ ……ああ、そうかも？」

だからか、と思った。

昔の夢を見ていたような気がするのは。

* * *

人間不信になって世の中に絶望し、もう自暴自棄になって西海に身投げしたというのに、この龍王はそんなのはどうってことないと言わんばかりの口調で言った。

「美人は自殺しちゃダメ！」

「どうしてです……？」

「勿体ないから！」

「……」

なんだか議論をする気力もなかった。

ただ、飲み物を渡されて、その暖かさに涙が出たのは覚えている。

私はまだ二十年ほどしか生きていないのに、生きる拠り所というものがどこにもない――。

「そうそう、西洋の端っこの国ではね、性のオーガズムのことを『小さな死』って言うんだ」 (※*la petite mort* エクスタシーを表現するのに使う)

「……はあ？」

「君が死にたくなったら、僕が毎晩『小さな死』ならあげるよ」

それが、愛の狩人の口説きの始まりだった。勿論、最初は半分冗談だと思っていたし、まともに取り合うつもりはなかった。

西海龍王は、好きなだけここに居ていいと言ってくれたが、生きる気力をなくしていた私はその言葉に感謝しつつも無為に日々を過ごした。

そうして暫く琥珀宮で静養をしていたが、とかくこの宮殿は内装も派手なら出入りも派手で、玄関先で女性二人が喧嘩してるなんてことは日常茶飯事だった。

私は『行き倒れの旅人』というポジションで、大抵は奥殿に居たし、そういう痴情沙汰に巻き込まれることはなかったが、いずれにしてもこの龍王が変わり者で、女好きで、仕事をしない男だということは分かった。

「ああ、一応、軍事職に就いてはいるんだけど」

と言っていたが、仕事をしてる姿は一度も見ていない。

「まあ、四方軍つてのは有事の時しか仕事ないしねえ」

「しかし、登城したり、とかないんですか」

「ウチにこんな美人が居るのに、出掛ける男は居ないよ」

いや、そうじゃなくて……。アンタは女に逢うためだけに外に行くのかい。

龍王様がこんな女好きなら、地上の男が墮落し切っているのも仕方がないというものか。

しかし、この龍王は、私を含めた女性というものを全て宝物のように扱った。

育ちがいいとこんなに余裕が持てるものなのかと、少々斜めの感想を持ったが、なにもかもが徹底しているこの龍王には、最後には敬意を抱いた。

琥珀宮を訪れる女性客は当然多かったが、男性客もそれなりに居た。

客というより、仕事上の色々な催促のために来ている官吏も多かったが、中には純粹に西海龍王と交友を交わすために訪問してくる男性客も居た。

その一人が、燧人^{すいじん}氏だった。

崑崙の仙人と名乗った初老の男は、自分の暇つぶしか私の気分轉換のために軽く提案しただけなのだろうが、私は彼のつけてくれる劍術の稽古に夢中になってしまった。

最初に学問を教わったときのような、知らないものを知る楽しさというのがあった。

それを少し心配そうに見守っていた西海龍王は、それでも私がもう立ち直ったと判断したのか、ある日、こんなことを言い出した。

「仙人になってみる気はある？」

「『仙人』ですって？」

「君はもう人間界には戻れないと思う。精神的にも物理的にもね。でも、君の居場所は仙界にならあると思う」

「私は人としての禁を犯した身です。今更、どこに居場所がありましたらどうか」

しかし、燧人氏は、

「仙人にも殺劫さつこうというものがある。決して万能じゃないよ」と笑いながら言った。

「貴女が望むなら、歓迎しよう。仙骨は充分すぎるほどある」

……『仙人』に？ この私が——？

それからすぐ道士となり、しばらくして仙人となり、その後を生きてきた。色んな師から、様々な学問や武術、そして仙術を学び、長い年月を重ねてきた。

それでも、私はまだまだまだ仙界ではひよつこだ。

崑崙防衛隊長などという肩書きを貰ったのも、私にしてみれば出来過ぎだと思っっている。

今更ながら、龍王様に、なぜ私を仙界に行くよう薦めたのか聞いてみた。

「あのまま僕のところに居ても、きっと君は満たされないだろうと思ったんだ。かと言って、地上にも未練はなさそうだったし……。え？　なに？　もしかして後悔してるの？」

「いえ、感謝こそすれ、後悔なんてしてませんよ」

「そう、よかった」

私には、龍王の愛妾として、あの琥珀宮で贅沢な日々を過ごすという選択肢もあつたんじゃないかと思う。

しかし、それを、この龍王が提案しなかったのは正解だ。

どんなに恩があるイイ男でも、私は彼を『下』にしかできないのだから――。

通天主教主というのは、なかなか一筋縄ではいかない男だという。

何度か直接戦ったことのある燃燈ねんとろうが、そう零していた。

しかし、私に言わせれば、あの截教のボスも大義のない阿呆だ。大義があつたとしても、戦争したがる奴なんて大抵阿呆に違いないが。

不毛に続いている闡教と截教の争いも、大元は、女にフラれた男が腹いせに起こした戦争に過ぎない。

自分の王国を作つてそれに満足していればいいものを、なぜ男が支配欲に取り憑かれるのか、私には未だに理解できない。

それが雄の遺伝子情報なのだとしたら、誰かが配分を間違えたのではないだろうか。

ただ、その配分のバランスが取れた男も居るには居る。

少なくとも、いま、私の近所に居る二人の男は（対照的ではあるものの）そう

だった。ほどよいバランスを知っている。

一人は、生まれたときから全てが揃っていたために余裕があり、もう一人は、全てを己の力で勝ち取ったのでそれ以上を望まない。

しかし、この二人の決定的に違ふところは、と言えば――、

「陽輝大将——！」

街中で喧嘩騒ぎを起こしている男が居る、というのを聞いて駆けつけてみれば案の定、広場には愚連隊の大將が居た。

私は便利屋か！　なぜ駐屯先でこんな仲裁役をしなければならん！

喧嘩の真つただ中に飛び込んで暴れている若い男を蹴飛ばし、陽輝大将が抜こうとしていた懐の獲物を阻止すべく、一喝した。

「待て——！」

こんな力技で騒ぎが収まるはずはないが、とりあえず、若者数名は私の出現に怯んだようだ。

「よお、九玄姐さん。お役目ご苦労さん」

「阿呆！　こんなの私の仕事じゃない！　騒ぎを起こすなど、あれほど——！」

「まあまあ、そう言うなつて」

と、陽輝大将は私を宥めるように、両手を広げて誇示した。

その目が『分かった、抜かねえよ』と言ってるので、ホツとした。

やる気があるんだかないんだか、いまいち分からないが、この愚連隊の大将があの龍王と決定的に違うところは、やはりこの戦闘意欲だろう。

売られた喧嘩は全て買ってやる、というその好戦的な瞳は、西海龍王にはない。あの人は、喧嘩を売られないようにするにはどうしたらいいのかというのを熟知していて、極力面倒なことはしない人だ。

血気盛んな若者数名を、後続で駆けつけた部下たちが取り押さえ、なんとか場は収まったが、呑気に一服している陽輝大将を、天界関係者だからと言って無罪放免にするわけにもいくまい。

表向き、私に天界軍の将校を連行するような権限はないが、個人的な誘いという形なら構わないだろう。

「私の部屋でコーヒーでもご馳走しよう、陽輝大将」

「まあ、姐さんが連れてつてくれるつつうんなら、ラブホだろうが留置所だろう

が、どこへでも行くさ」

「……いいから、さっさと来い」

留置所にブチ込むつもりはなかったが、喧嘩の原因は険悪に聞き出した。

「この前の妓楼の一件でのハライセだろ？」

と、ソファに脚を投げ出して、一言で済まそうとする。

「本当にそれだけか？」

「他になにがあるって言うんだ。ありや単なるパンピーだぜ」

「そのパンピー相手に熱くなって銃を抜こうとするような貴方でもあるまい」

「……」

「聞こえないフリをしたって無駄だぞ」

「……アンタ、ちよつと俺の同僚に似てるな」

「……?」

「ま、いい。確かに、あの中に一人厄介なのが居た。截教の回しモンだぜ、多分

な」

「なるほど」

スパイなんてどこにでも居るが、この街に入り込んでいる輩が居るのは知らなかった。崑崙の情報局はなにをしてるんだ、全く。天界軍の将に先を越されてるようじゃ面子は丸つぶれだ。

「それはこちらでなんとかするとしても……。一体、貴方はいつまでここに逗留する気なんだ、陽輝大将」

「追い出したいのか？」

「……」

なんだ？　いまのちよつと意味深な視線は。

「騒ぎを起こさないのなら、外貨を落とす客としてこの街の者は歓迎するだろうが、私の立場から言わせてもらえば、天界側の軍部とこれ以上関わりたくないでな」

「フーン……」

「……」

だから、なんだ、その面白くなさそうな態度は。

「前に『気になることがある』って言ったよな？」

「ああ……、覚えてるが？」

「俺の『気になること』は、アンタは気にならないのかい？」

「……？」

眉をひそめて、この男を見た。

なにか極秘情報でも掴んでるのか、と思ったが、この仙界の領土で、この男が掴んでいる情報があるとしたら、遅かれ早かれそれは私の耳にも届くだろう。

「気にならないと言えば嘘になるが……」

「別に、仕事のことじゃねえよ？」

「……？」

ますます眉をひそめた。

仕事じゃないなら、個人的なこと、ということになる。

そして、大概、それは色んな意味でトラブルになる。

「いや、仕事じゃないなら、余計に聞かない方がよさそうだ」

「そうかい」

と、陽輝大将が大袈裟に溜息をついたとき、部下が慌てて執務室に駆け込んできた。

「た、隊長……！」

聞く前にトラブルになったか、と思ったとき、近くと遠くで、爆発音が聞こえた。

「——ッ!？」

幸い、近くで起こった爆発は、この執務室の壁を半分だけ抉って、ソファやらデスクやらをひっくり返す程度で済んだが、それでも、駆け込んできた部下は天井の下敷きになって脚を怪我していた。

しかし、それに構ってる暇もなく、通りに悲鳴が聞こえ始める。

なにが起こってるというんだ——。截教のやつらなのか。

「大丈夫か？ 姐さん」

陽輝大将は窓外を見つつ弾倉を確認している。

「無傷だ」

短く答えて、愛刀を背負った。

恐らく、今の爆発で連絡網は寸断されただろう。

私が現在動かせるのは、駐留部隊五十名ほどしか居ないが、彼らは日頃の訓練でこういふときにはどういう行動を取るべきなのか、知っているはずなのでどうとでもなる。

私に喧嘩を売ったことを後悔するなよ、どこかの阿呆めが――。

5 城壁の街

あちこちで黒い煙の出ている市街地に、夕闇が迫っている。

隣を走る軍大將が忌々しそうに言った。

「チツ、俺がわざと喧嘩沙汰にした意味がねーだろ、これじゃ」

「なに……？」

「さっき俺が言った截教のエージェントはな、とある男の命令で動いてるんだが、そのとある男ってのが、元は天界側の諜報部員でね。この騒ぎは、余計なことを喋られたら困るその元諜報部員が、捕まったエージェントを殺しに来たか、脱獄させに来たか、どっちかだろ。まあ、近所に死体はなかったから、脱獄のほうかね」

「そういうことか。しかし……、大がかりすぎないか……？」

一人逃がすのにこの爆破騒ぎだ。割に合わない気がする。

途中で出くわした警備兵の一人が、まだ非常線にはなにも引っ掛かっていない

と報告してきた。

この騒ぎを起こしている犯人グループは、まだ街の城壁からは出られていないはずだ。

逃げられるとしたら上空のみと判断し、霊獣に乗って逃げてくれれば対空火器で一掃できるが、さすがに『霊獣持ち』ではないらしい。

「しかし、よくこんだけの爆薬を仕掛けられたな」

陽輝大将が見渡す先にも、火と煙が立ち上っている。

奴らは騒ぎを利用して脱走する気だろうが、この爆発物は今日のために用意されたものではないだろう。

恐らく、もっと前から、別の目的で仕掛けられていたに違いない。

「チツ——」

陽輝大将は、建物の脇に走った影に発砲した。

短い呻き声と共に、誰かが倒れる音がする。敵の足止め要員か。

このまま視界が暗くなってきたら不利だな、と感じた。

「天界側には、その元諜報部員とエージェントに対する暗殺命令が出ていたの

か？」

「とつくだに出てるさ。しかし、上層部の腹は、崑崙側に拘束させて、始末をつけさせたいみたいだね」

「ご都合主義だな」

「姐さんも知ってるんじゃないのか？ その元諜報部員ってのは二重三重に裏切りを重ねてる奴だ。恐らく、ここ数年は闡教側に居ただろう」

「まさか、『白猿』^{はくえん}か？」

本名は知らないが、その通り名はアングラ的には有名だ。

「ああ。帝都では袁^{えん}と名乗っていた」

わりと最近まで、普通に崑崙の边境警備に就いていた男だったはずだ。

そして、つい最近、崑崙の情報局が『dead or alive』と指名手配した裏切り者でもある。

しかし、その『白猿』が、元々は天界出身だとは知らなかった。

「主義主張じゃなくて、私怨で動いてる奴だね。だから働く場所は問わないんだろうよ」

陽輝大将が言う間にも、また通り向こうで爆煙が上がる。なんか、段々腹たってきたな。

「派手にやりやーがって！ 街一つ再建するのに幾らかかると思ってた。請求書はどこに出せばいい!？」

白猿のいまの主は誰なんだ。

「結構ガメついな」

と、陽輝大将は笑ったが、ふと真顔になって、あの目を見せた。この前のミツシヨンでも何度か見せていた、これは静かな修羅の目だ。

その視線の先には、路傍に倒れている住民が居る。

「やっぱ始末しなきゃならねえか」

その言葉が少し憂鬱そうだったので、聞いてみた。

「『白猿』と知り合いなのか？」

しかし、陽輝大将は答えなかった。

ただ、漫然と空を見上げ、苦い顔をしていた。

「……どうした？」

「『神は不殺生』——って話を知ってるか？」

「ああ……？ まあ、有名な話だからな」

「一応、俺たちの側の『建前』だ。しかし、どこの世界にも例外はあってね。公には生殺与奪ってのは一握りのVIPにしか認められちゃいないが、実情、天界軍部は皆その禁を犯してるし、暗黙には全ての軍属にそれは認められてる」

「……」

「でもな、九玄姐さん。天界に住んでる俺たちが、率先して命を奪ってちゃ、誰も救えねえのよ」

「……」

「だったら、『神も殺生しまくり』に変えて、お綺麗な看板は降ろした方がいい。神なら人を救えるって考え方がそもそも間違ってるぜ。……そうは思わないか？」

「いまする話なのか？」

「ああ、一応、側に居るやつに言っておこうと思っただけさ」

そのとき、エンジン音がした。バイクに乗ってやって来たのは、戦場でも常に

陽輝大将の傍らに居た若い男だ。

「大将！ ソフテイル、持ってきました！」

「いいタイミングだ、由基^{ゆうき}。しかし、『それ』はおめーが使いな。祥倫^{しょうりん}と二人で南に向かえ。俺は空から行く。このまま爆発に足止めされながら徒歩で行っても間に合わねえ」

「空？ しかし——」

と、副官が訝る傍で、陽輝大将は私を見て、

「姐さん、霊獣持ってたな？ あれを貸してくんねえか？」

「青鸞^{せいらん}のことか？ しかし、あれは私でなければ言うことをきかない」

「女か？」

「は……？」

「いや、女なら大抵、俺は乗りこなせる。更に、ジャジャ馬は結構好きな方だし慣らすのは得意でね」

「……………」

ついさつき、イイ話を聞いた気がするが、これだ。

「た、タイショー……、なんか、九玄さん、怒って……」

「大事な霊獣をお前のようなゴロツキに『乗られて』たまるか。……が、『白猿』に逃げられても、私の株が下がるだけなんでそれは遠慮したい。ということ、私が一緒なら同乗させてやるが、どうする？」

「クク……、いいねえ、その三段論法」

青鸞を飛ばす以上、地上の射手たちには、夜目の利く、腕利きだけを配置した。

といっても、『白猿』は空から逃げるつもりはないだろう。この街の防衛網を知っているはずだからな。

「さて、野郎共、始めるぞ」

西方軍大將は、戦場でしか見せない目をしたまま、地上に散らばる自分の部下たちに指示を飛ばしていた。

個別に小型の通信機器を持っているようだ。大した技術部門を抱えてるな。

さすが天界軍。

「地理は把握してる。脱出ルートは恐らく二本しかない。もし俺の方に来なかったら、そっちで死ぬ気で押さえろ。いいな？」

三百六十度城壁で囲まれた街には東西に一箇所づつ、街への出入り口がある。犯罪者が逃亡する際にそこを使うはずはないので（そもそも門は固く閉じられているし、武装した兵が居る）、脱出するには南北の地下通路を使うしかない。が、ほとんど街の者でさえ知らないそんな抜け道を、この男がどうやって知ったのか。やはり敵に回したくない男だ、と思った。

北の通路は森への抜け道になっているが、特殊な鉱石のせいで磁石が効かないというリスクがある。

そして、南の排水路は、西南を流れる小さな川に繋がっているが、小さすぎて複数パーティーが急ぎで脱走するには不向きだ。

陽輝大将自身は、青鸞を北に向かわせたが、その理由は『逃げる者は北走するもの』だからだそうだ。

つまり、単なる勘なのだが、この勘というのが曲者で、歴戦の強者つわものになると、

意味もなく当たる。いや、恐らく、意味はあるのだ。それは、様々な経験から推測される、かなり論理的で合理的な結論だからである。

「白猿の目的は、当初は『如意書』にょいしよだったのだろう。近いうちにこの爆発騒ぎを起こして、それを奪うつもりだったのが、今日のことですべて予定が狂って、仕方なく、決行した——といったところだろうか」

陽輝大将が幾つか明かしてくれた情報のお返しというわけでもないが、目的地に着くまでに、その話をした。

「『如意書』？」

中身に関する話は極秘事項だが、その書物がこの街に保管されているということとは別に極秘事項ではない。

「要するに、崑崙側の機密文書だ」

「フーン……、それを手土産に通天教主に媚売るつもりだったのか。つまんねー奴に成り下がったもんだぜ……」

「因縁があるようだな？」

「直接にはないんだが……、俺の長年の戦友の部下だった男でね」

「フム……」

街の北端に到着し、陽輝大将は青鸞の頭をポンと撫でた。

「ありがとよ、乗り心地は悪くなかったぜ」

「……コラ、礼を言うなら私にも言え」

「あ？ 姐さんも頭撫でられたいのか？ それとも、乗りたいののか？」

「阿呆。私は乗る方専門だ」

「ま、そうだろうな……」

などと、妙に怪しい内容をサラリと交わして、陽輝大将は青鸞を降りた。

「ここからは俺の仕事だ。街に戻ったら、今度はコーヒーじやなくて酒にしてくれ」

ここまで来たからには助力してもいいと思ったのだが、陽輝大将は一人でやるつもりのようなだった。

「缶ビール一本くらいなら」

「姐さん、あんた結構シワイぞ」

「やはり読まれていたか」

呻くようにそう言ったのは、二人組のうちの一人だった。これが白猿か。

一見、普通の市民に見える。これと言って特徴のない顔だし、官庁街にも小間物問屋にも居そうだ。三十代の凡庸な男。しかし、スパイというのは大体そんな容姿をしている。

もう一人の若い男は、昼間の喧嘩騒ぎで留置所に放り込んだ男である。

邪魔するように立ちふさがる陽輝大将に対して形だけ剣を構えているが、及び腰だ。

截教のエージェントらしいが、ということはいまの白猿にとっては命綱で、通天教主に目通りするまでは死んでもらっては困るといわけか。

「よ、袁公、久しぶりだな」

くわえ煙草のまま、旧友にでも会ったような口調で陽輝大将は挨拶をする。

私は青鸞に乗ったまま、少し離れた場所で滞空していた。

「この一連の茶番は、貴方が仕組んだというわけか、陽輝大将」

「さて、俺は妓楼の姐さんとしっぽりやってただけだが……」

半分は本当のことだろうが、そうと見せかけて、街に潜伏中のエージェントに目星をつけ、煽りながら、その仲間に出させるようにしたのは間違いなくこの男だ。

崑崙の情報ファイルには、西方軍大将は『油断のならない男』という項目をつけくわえておこう。

「おかげで計画が狂った。その憂さくらいは晴らさせて貰う」

「計画が狂うのが嫌なら、お前がその若造を見捨てりやよかつたんじゃねえのか？」

「それができれば苦労はしないというもの。ところで……私の元上官殿はお元気か？」

「さあ？ ……自分を捨てた男のことが気になるかい？」

「……」

白猿の顔色が変わった。

ん？ どういうことだ？

「俺アな、袁公。アイツのやり方は確かに外道だとは思いますが、口を挟む気はねえよ。そんなの、当人の問題だからな。だが、フラれた腹いせとか、見返してやるってつもりで裏切ったんなら、もつと腰据えてかからねえと、破滅するだけだぜ？ ……って、もう遅いか」

「……」

どう聞いても痴情沙汰なんだが、つまり、そういうことなのか？

「アイツに心酔しちまったまま、捨て駒にされて死んでった奴らの方がよっぽど幸せだと俺は思うが、まあ、それもお前の選んだ道だ」

「……」

情の絡んだ話か、と嘆息したが、そもそも情の絡まない戦場なんて、ない。

そして、その情によって命の奪い合いをするというこの愚行は、人も仙人も、ましてや神もなんら変わらないのだ。

「袁公、お前に選ばせてやる。ここで俺に殺されるか、神に許されぬ自刃で果て

るか、どちらかだ」

陽輝大将がそう言い渡すと、

「抗いますよ、どこまでも。それが命ある者の本能ですから」

白猿は開き直ってそう言った。

「フン、裏切りを重ねてるやつがマトモなこと言ってるじゃねえよ。……だが、その覚悟は嫌いじゃねえな」

街の爆炎を背景にした白猿が動く。若いエージェントが手にしていた剣を奪った。

「……っ!？」

しかし、容赦のない西方軍大将は、白猿が斬りかかってくるのを待たずに、懐のハンドガンを抜いて、一瞬で終わらせた。

なんて外道なんだ。

腰を抜かしたエージェントの方は、我に返って逃走しかけたが、それも陽輝大将の数発の威嚇射撃によって、逃げる気力も奪われたようだ。

「そいつは姐さんの方で好きにしな」

「こんな小物一匹捕まえてもしょうがないが……、まあ、上への報告もあるから、一応頂いておこう」

「悪かったな、姐さん。ホントは袁公も生かしたまま捕まえたかったんだろ？」

「いや、どうせ『dead or alive』だ」

「シビアだねえ……、まあ、宮仕えなんてどこも同じか」

そう言って笑う陽輝大将は、最初に会った頃とはだいぶ印象が違って見えた。

* * *

まあ、確かにいい大将であるのは百歩譲って認めよう。

しかし、これを『イイ男』とするのは、少しはっちゃけて呑み過ぎた後の判断力が鈍っている時だけにしておくのが無難だ。

「そう言えば、この前言っていた『気になること』ってのは、結局なんだったんだ？」

数日後、相変らず妓楼に泊まり続けているらしい陽輝大将にまたしても通りの

カフェで会ったので、聞いてみた。

数人の部下も既に帝都に帰したようで、いまは文字通りの単独物見遊山らしい。

「ああ、あれはな……」

と、私を見る陽輝大将の視線が、やや下に向いた。

「……」

「……」

「……」

「俺の部下共が、どうもあれは上げ底じゃないかって言うんでな」

「……ナンノコトダ？」

しかも、チガウダロ……、それは、お前が自分で言ってたんじゃないか……。

「その話を本人が聞いてて、本当だとしたら、わざわざ肯定しに来るはずはないが、もし違っていたりしたら、我慢できずにいずれ訂正しに来るんじゃないかと思っ、待ってたんだが——」

「……」

途端に、ピンときた。

「もしかして……、あ那时候、私が聞いているのを承知でわざと言ったのか？」

「さあな？」

と、ニヤッと笑うところを見ると、そうに違いない。

「と言ってもな。俺は別にどっちだって構わねえよ？」

「ホ、ホウ……」

「真実、上げ底にしるそうでないにしる、大事なのはイイ女かそうでないか、だからな」

「ホ、ホウ……。で、その基準はどこにある？」

「ま、ぶっちゃけ、勃つか勃たねえか、じゃねえ？」

ヒクツと頬が引きつったのが分かった。なんなんだ、このケダモノ的俺様ルルは。

「俺の同僚にな、世間的にはすげー美人とか言われてる女が居るんだがよ、なぜか俺はちつとも勃たねえのよ、そいつを見てても」

「ホ、ホウ……」

「アンタ、なんでだと思おう？」

「知るかーっ!!」

コレは計算なのか？ それとも天然なのか？ なんでこんな阿呆で下品な男が存在することが許されてるんだっ!?

「まあ、続きを聞いてくれ。それでな、俺なりに考えたんだが、きつと、戦場で男たちが妙な気起こさないように、薬を仕込まれたっていう陰謀説が正しいんじゃないかと思うんだよな」

「……………」

「どうも、最近、連荘する気にならなかつたり、角度的に残念な気がするのは、そういうことなんじゃないかと」

「……………」

もう呆れてモノも言えない。

やはりこの男とはノンビリと街中で会うもんじゃない。

一瞬でも、この男になら『乗られても』いいかもしれない、と思った自分がやはりまだ未熟だった――。

二章 将神との出逢い

1 九玄の杞憂

崑崙での日々は、私を成長させてくれたと思う。

反面、地上に居た頃よりも、遥かに墮落したように感じるときもある。

それを堅物の燃燈ねんとうに言ったら、生真面目な答えが返ってきた。

「知識が増えると、その分、自分がいかに無知であったかを知る。それと似ているのだが、長く生きること自体が、墮落であると感じることは、俺にもある」

「……」

「といっても、俺は、お前の生き方は墮落とは正反対の位置にあるように思うが？」

「……」

いや、そりゃ、お前が私の遍歴を知らんからそう言えるんだと思うぞ……。

「それよりも、九玄。わざわざ俺を呼びつけて、一体何の用なんだ？」

普段、燃燈は自分の洞府であるれいしゅうざんげんかくどう靈鷲山 元覚洞で、ストイックな修行の日々を送っている。

崑崙の中でもその人柄と能力は抜きん出ているので、どこの組織・団体にも所属していないくせに、既に仙界のご意見番のような立場にあつて、私も頼りにしている人物である。

「ウム……、少し困ったことになってな……。天界の動きがかなり怪しい。それに乗じて、杏林会の連中が動き出しそうな気配がある」

「『杏林会』か……。厄介だな」

燃燈がそう言うのも、かの連中が、実は西王母様の黙認の下に動いているんじゃないかといわれているからだ。

防衛庁の立場としては、血気逸った連中を沈める役割があるので、もし噂が本当であれば私は板挟みになって動けなくなる。

「実際のところ、お前はどう思ってるんだ？ 九玄」

「ん？ なにを、だ？」

「防衛隊長としての立場から離れたとき、お前は天界と仙界のこの対立をどう見るか、ということだ」

「そうだな……。玉皇大帝の政策にはやはり無理があるようには思う」

燃燈は長年の同志という、気の置けない相手であるので、正直に吐露した。

仙界が発足して以来、天界側の一方的な取り決めによって、仙人たちには『仙界での自由』が『保障』されている。

仙界での出来事は全て自治に任せ、仙界の領域内なら何をしてもよいという一見、『無条件の自由』である。

しかし、それは巧妙な天界側の政策であって、仙人たちが気付いたときには、人界、天界への行き来も干渉も全て禁止され、『与えられた制限付きの自由』のみが残された。

それに不満を持つ者が多く、杏林会に代表されるような改革を望む派閥があちこちに出来ているのが崑崙の現状だ。

盟主である西王母様はずっと沈黙を守っているので、私にはその腹の内は分からない。

しかし、沈黙は肯定だと解釈する者が多く、杏林会の連中などは積極的に、自分たちの主張はすなわち仙人の総意、としている。

「本来、自由に真理を追究することが仙人の存在意義だとすれば、仙界が天界の束縛を受けているのがおかしいのだろうな」

「ウム……」

燃燈はずっと難しい顔をしていた。

この男が大口開けて笑ったりとか、陽気に酔っぱらってる姿というものを見たことはないが、私もこの男にははっちゃけた姿を見せたことはない。そういう、どこまでもシリアスな関係なのだ。

「いまの状況では、火種があればすぐにでも崑崙に飛び火するだろう。そしてその火種がどうも天界側にあるらしい」

「例の将神のことか？」

「ああ、噂ではあの哪咤なた太子の上を行く剛の者だというのが……、玉皇大帝とは犬猿の仲だそうだ」

「いままであの玉帝に大手をふって齒向かえる者が居なかった分、英雄視される

のは分かるがな」

「そうだ、だから加速度がつく。手を打つのに早いに越したことはない」
「なるほど」

燃燈は、私が呼びつけた理由を理解して、

「杏林会の数少ない保守派に会ってみよう。説得できるかどうかは分からんが……」

そう言ってくれた。

「頼む、燃燈。世話をかけるな」

「いや、俺もずっと気にはなっていたんだ」

「そうか……」

「しかし、九玄。最悪の事態になれば、強力な組織力を持たない仙界は一晩で瓦解するぞ。そうなれば、あとは一個人の信念しか残らない。そのとき、お前はど
うするんだ？」

「ウム、それも早急に考えねばならんことだろうな」

私が防衛隊長として出来ることなどタカが知れているが、やるべきことがある。うちは、やらねばなるまい。

崑崙の防衛庁のスタッフというのは、天界四方軍の一部隊分くらいしか居ない。

実質は、天界の従属国家のようになっている仙界が、天界に対して叛逆など起こさないように、軍備増強が出来ないようなシステムになっているのだ。

更に、個人主義者の多い（というよりも、個人主義者しか居ない）ここ仙界で、団結力のようなものは期待できない。

だから、もし天仙界の戦いになっても、無所属派党の仙道たちの自主的な参画など、到底望めないということだ。

正直言つて、私自身も、愛国心や忠義心からこの一世界を護りたいと思つているわけではない。

だからというわけでもないが、もし燃燈が言うように『最悪の事態』——つまり、天仙界の全面戦争——になつて、我が防衛軍が崩壊するようなことにでもな

れば、私はあっさりとその職務を放棄するだろう。

個人として、自分の生命や信念を守るべく戦うことはあるかもしれないが、『崑崙を守る』という志は残念ながらないのだ。

そんな人物が防衛隊長などと、笑うなかれ。

仙人とはそういうものなのである。

天界の動きは、一応、崑崙の情報局が随時探っているので、私もある程度なら知っている。

将神が代替わりしてしばらくは帝都も平穏だったようだが、ここ数年間こえてくるのは、その将神と天帝の不仲説で、最強の誉の高いあの将神はいつかは離反するのではないかという噂だ。

とすれば、崑崙側の反天帝感情を持つ連中が、その将神を味方につけたいと考えるのも分からない話ではないが、将神の思惑が仙道と一致するとは限らない。むしろ、そうならなければいいと、私や燃燈は水面下で色々な工作を試みていたわけだが、そのほとんどは徒労に終わった。

そして、いよいよ帝都の雲行きが怪しくなってきた頃、私は杏林会を牽制すべ

く、きんらん金鑾斗闕とけつで竜吉公主のボディーガードをすることになった。

杏林会のメンバーが、玉皇大帝の妹であるりゅうきつ竜吉 公主を盾に取ることも充分に考えられたからである。

やがて——、『その時』は来た。

金鑾斗闕に『将神決起』の第一報が入って数日後、密偵として各地に放っていた部下の一人が、杏林会のアジトを突き止めた。

2 不可解な将神

「全員、動くな！ 私は崑崙防衛隊長の九天玄女！」

最高にカッコつけて岩戸を蹴破り、大刀をビシッと正眼に構えてみた。

しかし、洞窟の中央に居たその女は、ものぐさそうにこちらをチラッと向いただけで、自分の仕事を続ける。

「あ、それ、ロン」

透き通るような美声だった。

恐らく、その美しい髪に隠れた横顔に相応しい声なのだろう。

しかし、まさか、この女が『将神』か——？ 誰かが連れて来た芸妓ではないのか、と思った。

「うわっちゃやく！ マヂっすか、緑麗りよくれい様」

対面の男が頭を抱え、この世の終わりとばかりに突っ伏した。

「貴君ら……。なにをしている……？」

構えた大刀をそのままに、見たら分かるのだが敢えて聞いてみた。

もしかして私はかなりズレたことをしてるんじゃないだろうか、と思いながら。

いや、違う！ズレてるのはコイツらだ!!

「なについて、麻將^{マージャン}（※「麻雀」は日本語）」

と、一局終えて満足したらしい女がやつとまともに振り向いた。

「……」

思わず、息を呑んだ。天仙界ではこんな金髪は見たことがない。

たまに、反骨精神からか、赤やら黄色やらに髪を染めるファンキーな奴も居るが、目の前の女はどう見ても天然だ。

こんな人形のような女が将神？ と、私はまだ信じられない気分でした。

「そなた、将神緑麗か——？」

そう問うと、緑麗は買い物カゴに中濃ソースを入れるついでのように答えた。

「その称号はもう返してきた。いまの私はただの雀士。……あ、酒が切れた。

ジュン」

「はッ、只今！」

「ついでに、タバコも切れた。チョーサク」

「はッ、只今！」

「あゝ、なんか、肩こつちやつたなく。ショウジ」

「はッ、只今！」

次々に、従者らしき男が緑麗の要望に答える。

「……」

なんで誰も『そこはミナミハルオじゃ？』と突っ込まないんだろう。

あ、突っ込むポイント違うのか。

それにしても、ごく当たり前のように瞬間移動している従者三人組からして只者じゃない。

一体どこからその酒やタバコを出したんだ。四次元ポケットか。

「えーっと……」

い、いや、落ち着け、自分。

こいつらのペースに乗せられてしまうと、私の自我はきつと崩壊する。そんな

自己防衛本能が働いて、とりあえず、この場面では限りなく間抜けな感じの大刀を納め、咳払いをした。

しかし、呑気に雀卓を囲んでいる将神の一行は、既に洞窟内を囲むようにしている我々を見向きもせず、また雀牌を混ぜ始めたのだ。

なぜこいつらはこんなに落ち着いてるんだ？　と思ったが、それは恐らく、リーダーたるこの女がちつとも動じていないからなのだ。

もし緑麗が少しでも抵抗したり、反撃するつもりがあるのなら、彼らはもっと殺気立っているはずだ。

とりあえず、なにか言おうと口を開きかけたとき、

「娘々ニヤンニヤン？　丁度いい。一人沈没したのが居るから、代わりに打っていかんか？」

鼻かむティッシュを取るついでのように、緑麗が言ったので、思わず答えてしまった。

「……喰いタンありますか？」

その日は徹マンになったが、さんざん緑麗にカモられたことは覚えている。

つーか、強すぎだろ！ お前！

なんだ、そのいきなりの天和テンホーとか地和チーホーとか！ ありえねーだろ！ フツー！

と、ひたすら負け続けたのだが、最後の最後で、こつ、これは国士を狙えと!? という歓喜の叫び声をあげたくなるような配牌に恵まれ、震えるような思いで（手は震えてたかもしれない）、捨て牌を切ったとき――、

その絶妙のタイミングで、

「あ、それ、ロン――」

緑麗にピンフでアガられた……。

百年分くらいの幸運を逃し、二百年分くらいの不幸がやってきたような、そんなこんなで、もう自棄になって、緑麗が火雲宮かうんきゆうからくすねてきたとかいう、幻の銘酒『TAIZAN』を勧められたりしながら、その後はかなり弾けて、楽しい一夜を過ごしてしまった。

「……あり？」

私、なにやってんの？ つうか、なに？ この展開……。

緑麗は大勝ちした余裕もあるのだろうが、ご機嫌な様子で、美声のくせにヒドイ音痴な歌まで披露していたが、私が引き連れてきた部下たちなんか、いつの間にかそのカラオケ大会にちやっかり参加していたりして。

「……あり？」

あのさ……、私たちって、この一行を捕まえるとか、最悪、斬り合いとかするつもりで来たんじゃないやなかったっけ……？ 緊張感なさすぎだろ！ お前ら！ 自分の立場、分かってんのか、ゴルア——！！

3 龍脈のはじまり

何度も言うようだが、私は緑麗を捕まえに来たのである。

罪状は国家内乱罪および内乱予備罪である。

しかし、それを聞いた緑麗はこともなげに言ったのだ。

「フム。おかしいぞ。私は別に仙界に対して他意はないんだがな。確かに火雲宮には果たし状投げ込んできたが、ようち瑶池（※西王母の居住地）を襲うつもりはな
い」

つまり、玉帝に喧嘩を売ってきたがいまは休戦状態で旅行中と言い張るのだ。

その超法規的な言い訳が世間的に通用するはずはないのだが、実は、仙界の法では高飛びしてきた天界住民を拘束できないのも事実なのである。

だから、押し問答の末に、「なら監視目的で私がここに居座る」ということくらいしかできなかつた。

完全に調子を狂わされた。

当初の目的が宙ぶらりんになったまま毎日、遊んでいるようにしか見えない将神一行に張り付いて、行動を共にするだけである。

しかし、それは決して不快なことではなかった。

杏林会の連中は、崑崙での逗留先を提供しているというだけのスタンスを保ちつつ、いまのところ積極的に緑麗に働きかけるようなことはしていなかったが、それは燃燈が裏で色々やってくれているおかげだった。

その逗留先というのは、とある仙人が以前洞府として使用していた場所で、緑麗が引き連れてきた数名がDIYで快適なペンションに造り変えていた。

「オハヨー、娘々……」

けだるい声と仕草で、もさもさの金髪が居間にあらわれる。

この世の終わりのような顔で、美人だけに寝起きのその形相が怖い。

「……もう昼だぞ」

昼過ぎに起き出してきた緑麗は、昨夜の酒が抜けてないくせに、迎え酒をして
いた。

冷蔵庫を開けて、缶ビールを取り出す。

「プハー……」

途端に、花のような——という表現は似つかわしくないはずなのだが、そうとしか言えない——笑顔になる。

「……………」

その一連の不思議な光景を見ながら、こいつは外見と中身が違いすぎる、と思った。

一見、花畑の中で詩集とか読んでそうな、三時のティータイムにはスコーンと紅茶を頂きますわ、なんて言いそうな、男と話す時は頬を赤らめて下を向きそうな、白いワンピースをなんの疑いもなく着てしまっそうな、そんな外観をしてるくせに、なんだその懐に常時忍ばせているスキットルは!? しかも、中に入ってる酒がハンパじゃない。『スピリタス』だとう!? それは五十倍くらいに薄めて飲むものだろうが!!

そして、なんだ、その両切りタバコは!! それはアフガニスタン在住の濃いオッサンが吸うモンであって、間違っても金髪美人がくわえたままふかしているシロモノじゃないんだぞ!?

「そなた本当に叛乱を起こしたのか？ 毎日なにをやっている」

お馴染みのトリオがささつと用意した朝食兼昼食をつつきながら、コーヒー飲んでる緑麗に言ってみた。

「なにって……酒宴？ ……麻将？」

「変な疑問形で答えるな！ そもそもなぜ叛乱など起こしたのだ!？」

「なぜって言われても、暇だったからか」

もう頭を抱えた。

「お、お前は、ツ、暇で叛乱起こすものなのかツ!? おかしいぞ、それは！」

「オカシイかな？ 小人閑居して不善をなす、というんだから、別にそれほどおかしくはないだろ」

「『小人』？ ……それは卑下にしか聞こえん」

「結構まともな評価だと思うんだが。いままでの人生、そんなに大したことでなくてないしな」

「『大したこと』をしてきていないのに、最強の将神と呼ばれている理由を、できれば軽く説明してくれ」

「うーむ？ 暇を持て余して仙人になったりする奴も居るだろ？ それと同じだな」

確かに仙界にはそういう変わり者は多いが――。

「いや、同じじゃない。勝手に同じにするな」

「あ、そうだ、娘々、この辺に秘境の温泉があるとかいう話を聞いたんだが」
なんなんだ、この脈絡のない会話は！！

お前は温泉ツアーに来たのか！！

「そこに連れてってくれないか？ やっぱ深酒した次の日は、温泉に限るよな

」

「……。温泉というか、ちよつと曰く付きのぬるい湧き水がなくはないが、地熱が低いので、湯あみに適した水温じゃないんだ。地元の間人は温泉としては使っていないはずだぞ」

「？ 地熱が低いなら、上げればいいのでは？」

「……」

ちよつと感心してしまった。

たびたび感じていたことなのだが、緑麗のこの思考はとても自由だ。

手段は後で考える（あるという前提で）、というのだ。

「どうやって？」

「たぶん、火行でなんとかなる気がする」

火行——、天界住民が持っているという五行の素養のひとつだ。しかし、緑麗は土行のはずだし、あのトリオも火行を持っている奴はいなかった気がするのだが。

「それよりも『曰く付き』ってのは？」

「うむ、実はな……」

その水源付近ではたまに妙な現象が起こるので、我々は少々警戒しているし禁足地とまではいかないが、それに準じた扱いなのである。

水質は問題ないし、毒性のガスが出ているわけでもない。なのに、たまに意識不明になる仙道が居るのだ。といっても、そこから離れればすぐに回復するので、いつか詳しく調べようと思っている場所でもあった。

緑麗にそれを言うと、

「ああ、たぶん大丈夫だろう」

と、あっさり言うので、任せることにした。

森を抜け、案内した風光明媚な場所で緑麗はしばらく「あゝ、なるほど」などと言っていたが、動かせるサイズの岩をどんどん積み上げて、にわか温泉を作ってしまった。

カポーン……

よく分からんそんなサウンドエフェクトと、ほんのりと立ち込める湯気の中、緑麗は頭に手拭いをのつけた姿で、寛いでいる。

「お前は……、深酒した身体を癒すために温泉浸かってんじやないのか」

「え？ うん、まあ、そうかな」

と、桶の中の徳利を持ち上げて中身を確認している。

「なら、酒を呑みながら湯に当たるな！」

その徳利を取り上げたが、

「え、娘々、カタスギー」

緑麗の傍らには一升瓶があるので、取り上げたことにはならない。

ここしばらく私は緑麗に怒ったり、呆れたり、散々小言を言ったりしているのに、緑麗はちつとも堪えていないらしい。

普通、もつとムツとするとか、言い返すとかしそうなもんだが、こいつときたら、始終、マツタリのんびりで、己のペースを貫いている。

「……はあ」

溜息をついた。

傍目には、女二人、湯煙の旅、である。

火行属性を持っていないはずの緑麗に、どうやって地熱を上げたのか、と聞いたら「理論が分かかっていて多少のセンスさえあれば初歩の五行は使える」のだそうだ。

天界住民たちは、普通の人間や仙道には取得しえないその五行力がそなわって

いるのだが、簡単に言えばそれは「元素を扱う力」ということになるのだろう。

「娘々、ここが崑崙の五行の中心なんだよ。仙道たちにはあまり関係がないのかもしれないが」

「そういうことなのか」

五行の気脈が溜まる場所。そういうのがあると聞く。

「うん。泰山とはまた違った意味で『氣』が濃い。五行の素養がないと失神する奴もいるだろうな」

「私も以前、この付近で意識朦朧としたことはある。いまはなぜか大丈夫のようだが」

「たぶん、いまは私がいるからだ」

「……?」

「私も神獣を抱えている身なんでな。その影響だろう」

「『黄龍』か」

緑麗がその身に宿しているという『黄龍』は、五行の全てを支配し、全てを感じる事ができるといふ。

「しかし、どうやらこここの気脈は『始点』がないようだ。自然發生的にこの地形になって、『氣』が溜まるようになった、ということか……」

「『始点』？ お前が言っているのは、『龍穴』のことか？」

「ああ、崑崙ではそういう言い方をするのか。そう、全ての五行の出発点となり、終着点となる場所」

「フム。で、その『始点』があると、どうなる？ それは人為的に作れるようなものなのか？」

「まあ、あつた方が格段に流れはよくなるだろうな。……ああ、そうか。これも縁か——」

急に、緑麗はなにかを悟つたような顔をして、素裸のまま立ち上がった。

「？ どうしたんだ……？」

「……私は貴女に導かれてここに来た、ということだ。『龍穴』と『龍脈』を作るために」

そう言つて、振り返つた緑麗が、ひどく印象的な笑顔を見せた。のらりくらりと私の小言をかわすときの笑顔でもなく、酒宴の席での哄笑でもなく。

「……？」

「龍神様も喜んでいるようだ。感謝する、娘々」

そして、黄金の緑麗の髪がフワッと乱れ、伸ばした両手の先からほとばし迸るほどの金色の粒子が流れ出た。

「我、将神緑麗の名の下に、神獣、黄龍の力を此処に解放する——」

「……」

夢のような光景を間近で見ながら、私こそこの女性に出逢ったことを感謝せずにはいられなかった。

黄金の龍——。

優美なその長い胴が緑麗を包み、巻くようにして踊った。

しかし、その神々しい黄龍の姿よりも、それを操り、御す緑麗の姿の方が、私にとっては衝撃だった。

一糸纏わぬ裸体で、遊ぶように自由な所作で、どこにも無理な力が入っていない。

この将神が戦場で闘う姿はさぞかし美しいのだろう、と思った。それが血に塗

れた姿であろうとも、泥水をかぶった姿であろうとも――。

「終わったぞ」

緑麗がこの時なにをしたのか、具体的には分からなかったが、『龍脈』の起点というべきものを作った、ということなのだろう。

その龍脈が、崑崙全ての山々を繋ぎ、さらには人界まで流れいずるのだ。

「多分、これで、少しは許されるだろう」

一息ついてから、緑麗はまた、あの儂い瞳を見せた。

「……？」

「黄龍のおかげで、娘々の裸体も拝めて、眼福だな」

「……？」

たまに、緑麗の言う言葉は意味不明に思えることがあった。

しかし、そこに緑麗の本音があるのだろう、ということは何んとなく分かった。

「こんな傷だらけの身体を見て、なにが嬉しい」

「裸の付き合いが嬉しいんだ。以前は一緒に風呂に入れる同僚が居なかったから

な―」

天界軍の女性士官の割合は一割にも満たないらしい。まだまだ向こうは男社会である。

仙道は実はそれほどでもない。むしろ、女性のほうが仙界入りを望む傾向がある。そもそも盟主が女性だ。

温泉から上がって髪を乾かしていると、

「娘々はいいな―」

しげしげと言われた。

「……？」

「天界では黒髪がモテるんだ。実を言うと、羨ましい」

あの伝統を重んじる場所では、漆黒の髪と瞳が正統とされ、それ以外は異端視されるといふ。

この唯我独尊の元将神でも、そういう奇異な視線に晒されてきたことに対する憂いはあるのか、と思った。

「閨では髪の色なんか分からんだろうに」

「プ……、そうだな」

緑麗がケラケラと笑うのを見て、少しホツとした。

思えば、崑崙入りして以来、この頃が一番楽しかったような気がする。

4 緑麗の覚悟

「緑麗、真面目に聞きたいことがある」
そう前置きをしないと、絶対茶化されると思ったので、キリツと表情引き締め
て迫った。

「んー？」

緑麗はいつものように聞いてるのか聞いてないのか、分からないような生返事
で、シャンパングラスを積み上げている。シャンパンタワーをやりたいらしい。

「どう見ても、なにか時間稼ぎでもしているようにしか見えないんだが、お前は
勝つつもりがあるのか？」

「なんで急にそんなことを？」

作業を止めて、やっところちらを見る。

「私とて、節穴ではないつもりだ。そなたの真意が知りたい」

「真意？」

「無血革命でも計画しているのか？ 叛旗を翻したきり、戦端を開こうとしないのはなぜだ？」

緑麗がここに来てから一月は経っている。

その間、天界側にも叛乱軍にもなににも動きがない。少なくとも私の知る範囲では。

緑麗はシャンパングラスを積み上げる作業を再開し、

「いやあ、なんか、もーメンドーになっちゃって……。叛乱なんかやめよっかなーって」

「~~~~~ッ」

いい加減、私もキレて、緑麗の胸倉をガシッと掴んだ。

「真面目に、と言っただろう！ 今日はお前の冗談には付き合わんからな！」

「あゝ、冗談でもないんだが……。すまん。分かった。真面目に答えよう」

緑麗は一番上に最後のシャンパングラスを置くと、傍らの『モエ・アンペリアル』を手に取った。人気の高級シャンパンだ。

こいつは本気で酒が活動エネルギーらしく、この前、アルコールが切れたと

言って、廊下で寝ていた。

阿呆か！

そういうとき、例の従者三人組がささつと寝床に運んだり、冷蔵庫に缶ビールを補充したりするわけだが、こんな体たらくでよく単独妖魔狩りとかできたものだ。

「お前が募った人数では、客観的に見てとても火雲宮は落とせないと思うが、なにか策でもあるのか？」

「やはり、そう見えるか」

「……？」

ポン、と『モエ・アンペリアル』の栓を抜き、タワーの上から注いでいく。

「今日はなにかの記念日なのか？」

しかも『アンペリアル（皇帝）』など、意味深すぎる。

「いや？　こういうの、ちよつとやってみたくて」

「……」

どうせまともには答えてくれないから、あとで調べてみるか。まさか玉帝の誕

生日じやあるまいな。

「勝てそうに見えないなら、もう少し『勝てそうな』戦いにしなければならんだろうな……」

シヤンパン数本を開けてタワーを完成させた緑麗は、一番上のグラスを取り私に渡してくれた。まあ、ありがたく頂戴するけどさ……。

「その第一歩として、杏林会の連中と手を組んだのではないのか？」

「まあ、そうなんだが……。それよりも、娘々」

「なんだ」

「娘々こそ、なんで私を捕縛しないんだ？　そのためにここに居るんだろう？」

「……」

そう言われても、答えるべき言葉が見つからなかった。

緑麗をどうこうするつもりは完全に失せていたのだが、それでも、彼女を捕縛して帝都に突き出せば、まだ崑崙は戦場にならずに済むかもしれない、とは思っていた。

それに、まだ今なら、杏林会の天界への叛意も不問にできる余地があるだろう

と。

しかし、それをするには、この元将神が眩し過ぎたのだ。

緑麗にはなにか胸に秘めたものがあるのだろうと思えた。私はそれが知りたかった。

「私は今まで、お前のような友には会ったことがなかった」

このときは、それだけ言うのが精一杯だった。

友、と呼んでいいものかどうか躊躇して、かなり狼狽した言い方になってしまったが、緑麗は静かに微笑んだ。

そして、何杯目かのグラスを空にして言った。

「私にも戦友と呼ぶべき奴が居る。これがまた、はっちゃけた野郎で、どうしようもない不良なんだが……」

このとき、緑麗が開けたグラスの数は、いま思えば、その友や、親しい人たちの分だったのかもしれない。

「それから、恋人と、世話になった軍医と、親代わりの人と……」

「……」

「帝都を後にしたとき、もうそんな心残りはこれ以上増やさないつもりだったんだが……。増えるもんだな。こういうのは。生きている限り」

「……」

このとき、なぜだか泣きたくなった。

緑麗は多くを語らない。だけど、確実に自分の想いを伝える方法を知っている。

「緑麗……、お前、なぜ男に生まれてこなかった。お前になら喜んで『乗られたい』と思うのに」

初めて心の底からそう思えた相手が同性とは、なんともやるせない。

「それも光栄だが……。娘々。男は乗られるものでも、乗るものでもないぞ？」

「じゃあ、なんなんだ？」

「酔っ払ったときに枕にするものだ」

「……プ」

「だから、私は筋肉マンはあんまり好きじゃないんだ」

「ホウ……」

なんとなく分かってきた。

この、常にマイペースでいられるところこそ、最強と言われる所以か。

「じゃあ、どういうのが好きなんだ？」

「ウーン、実は声さえよければ後は別にどーでもいいんだよな。ビジュアルは見
てないっていうか。実は私は半生、視力を封じて生きてきたんでね」

「……？」

視力を封じる？

どういう意味だろう、と思ったが、聞けなかった。

「いや、こういうのはあまり語っても、かち合った時にまずいな」

緑麗がそう言うので、

「私の趣味も結構変わってるようなんで、かち合うこともないとは思いますが」

「ほー」

緑麗が勝つつもりがないように見えたのはこの時までで、それからの緑麗は、
なにかを吹っ切ったように、『叛乱軍』を大きくしていった。

その後も、何度か、緑麗に叛乱を起こした経緯を聞いた。しかし、その度に誤魔化された。

最後に聞いたときは、

「すまん。娘々。お前の質問には全て答えられないんだ。だが、一つだけ約束しよう。最終的に、崑崙は守る」

そんなことを言っていた。

「そして、お前は討ち死にでもするつもりなのか？」

「いや、無駄死にするつもりはこれっぽっちもない。ただな、私は無力なんだよ。可能な限り、犠牲を出したくないと思う反面、そう思っているはなにも成し得ないのだと、思い切る勇気がまだ足りないのかもしれない」

「……」

緑麗が言っていた言葉を、私は逐一覚えていく。

「なあ、娘々。万物と同じように、全ての魂は流転するという。何度も生まれ変わって、この生き辛い世を生きなくてはならないそうだ。それは、不老長寿の神

も、その秘術を得た仙人も同じこと。ならば——、我々はどうしたらいい？ その転生の苦しみから逃れるために、どうすればいいのだと思う？」

「それは、私にも分からん」

「私は、もう、情人の腕に抱かれることも、残してきた友と酒を酌み交わすこともできないだろう。しかし、私の魂がいつしか、また彼らと巡り会えるのなら、私は喜んで死んでいける。そう思う」

「来世への望み——か？」

「フフツ……、少し、感傷的か？」

「いや、望みがなければこの世は終わりだ。絶望の中では人は生きられない」

「そうだな。私に残された時間はあまりないかもしれないが、最後に出逢えた友と、極上の酒を酌み交わす時間はまだ少しあるようだ」

「……」

この時、はっきりと緑麗は死ぬつもりなのだと分かった。

緑麗自身が書いたこのシナリオは、自分が死ぬことで完結するのだ、と。

なぜ反旗を翻したのか。それはきつと、生きているうちに誰かに告げることがは

許されないのだろう、と思った。

「緑麗、お前がどんな因業を抱えているのか、いつか教えてくれるか？」

「そうだな。いつか、語れる日が来るかもしれない」

「来世で、か？」

それには、答えなかった。

ただ、消えそうに儂い微笑を浮かべて、いつもどこを見ているのか分からぬ瞳で、空を眺めていた。

その頃になると、緑麗が決起したことは天仙界中に知れ渡っており、天界軍部は元将神の潜伏先を躍起になって探していた。

南崑崙の杏林会のアジトはまだ突き止められていないようだったが、それも時間の問題だった。

私は既に、西王母様より内々の辞令を言い渡され、事実上、崑崙防衛隊長の任から解かれていた。

私は緑麗を捕縛できる場所に居ながらにもせらずに静観していたのだ。当然である。西王母様の処遇は正しい。

しかし、私には、その辞令が、枷を外してくれたのだ、と思えた。

「世話になった、娘々。私は崑崙を去る。やっと厄介払いができるな、喜べ」
緑麗がそう言ってきたのは、年明けの雪が散らつく、寒い朝の日だった。

いつもは昼過ぎまで惰眠を貪っている無職アル中が、その日は、同性の私です

ら目も心も奪われてしまうような凜々しい姿で、これは誰に惚れられても仕方がないと思った。

「竜吉公主様には会って行かれないのか？」

他に言うべき言葉が見つからず、そんなことを言った。

「会ってどうするのだ。苦しむだけだろう。兄と友人が戦わねばならぬのならせめて中立を守った方がよい。西王母の決定は当然だよ」

緑麗が崑崙を出ていくことにした直接の原因というのは、西王母様が発した声明によるのだろうか。

その声明とは、元将神が崑崙に潜伏しているのはデマであり、仙道が天界に謀叛を企てている事実はない、というものだ。

あくまでも表向きは恭順を貫こうとする西王母様の政治的決断である。

緑麗は特にこれに異議を述べることもなく、『崑崙の総意』を事実にするつもりのようにだった。

なぜそこまで潔くなれるのか。

緑麗に勝手に近付いて、崑崙に招いたのは杏林会の方なのに、緑麗自身はそれ

すら『一宿一飯の恩義』と言い切る。

「緑麗。私も連れて行ってくれ」

私が覚悟を決めてそう言ったとき、緑麗は珍しく驚いたような顔をしていた。

「娘々、ここから先は地獄だぞ」

「分かっている。だが、お前を一人にしたら、なにやらかすか分からんからな」

「お目付け役か」

「私を戦友とするのなら、お前に私を止める術はないぞ」

戦友とは、戦場を共にしてこそその尊称だ。

緑麗は諦めたように微笑して、

「やはり縁というものはあるのかもしれん。娘々は、私が帝都に残してきた戦友の魂が乗り移ったかのようなだな」

「それ、誰のことを言っているのか、当ててやろうか？」

「知ってるのか？」

「何度か会ったことがある。陽輝大将だろ？」

「フフ、娘々は凄いな。なら、私も娘々が少し驚くことを言ってみよう」

「なんだ？」

「今から、琥珀宮に行く——」

緑麗が西海龍王と知己であるという話は知らなかった。

「心配するな。艶っぽい関係じゃない」

緑麗はそう言っていたが、それは、二人の様子を見ていればすぐに分かった。

それに、心配するようなこともなかった。私はもう随分前にこの情夫との関での関係は終わっている。

いまは寧ろ緑麗との関係に近い。

「夢のようだねえ。噂の美女二人と一緒に訪ねてきてくれるなんて」

西海龍王は、変わらずにそんな台詞と共に迎えてくれたが、その表情は少し硬かった。

当然、この龍王も緑麗が今どういう状況にあるのか知っているだろうし、彼自身にも緑麗捕縛の命が出ていたとしてもおかしくはない。

緑麗は西海龍王になにか密談があつてこの琥珀宮を訪ねたのだろう、と思つたので席を外した。

「緑麗、私はお茶をご馳走になつてくる」

「あらら、九玄ちゃん、素っ気ない……」

「謝謝、娘々」

そう言えば、と、ふと思ひ出した。

前に、西海龍王に見せてもらったことのある、彼の祖母の写真だ。龍族一の美姫といわれていたらしい。

その太古の龍王姫が、緑麗に似ているような気がしたのだ。

もしかして、この二人は縁戚関係なのか？ 緑麗は、自分の出自の話を一切しなかつたので、本当のところがどうなのかは分からないが、龍族の血が流れているという噂は私も知っている。

「九玄様！ お願いです、どうか——」

と、中庭を出たところで、緑麗の従者三人組が追い縋つてきた。

「九玄様から諫言して下さるように、どうか！」

「待て、お主ら、なにを言ってるんだ？」

「緑麗様は、我々を見捨てる気なんです！」

「……？」

仲良くワイワイやってきたこの三人組を、緑麗が手放すはずはないと思ったのだが、話を聞けば、つい今しがた緑麗に『罷免』されたという。

「しかし、お主たちは、もはや軍籍ではないのだろうか？　つまり、自分の意思で緑麗に従っているのではないのか？」

「勿論、そうです。緑麗様がなんと言おうと、我々はどこまでもついていく覚悟で、帝都を出てきたんです。なのに……」

涙ぐんだその従者の言葉を取って、もう一人が続けた。

「緑麗様は、『正規』の手続きで我々を軍属に戻し、結果、我々はこの琥珀宮の警備の任を拝命してしまっただけです」

「なるほど……」

そういうことか。

それが緑麗の親心なのだということを理解しても、これは切ない。

私だっていま、緑麗に突き放されてしまつては、恨んでも恨み切れないだろう。

「緑麗には緑麗の考えがあるのだろう。私には、それは変えられない。すまん」

「そつ、そんなあ、九玄様あ……」

「長く生きていけば、不遇のときもある。だが、それを耐え忍んだ先になにかがあると信じなければ、お主らも生きてはいけまい——。だが、心配するな。お前たちの無念は、きつといつか報われる」

「九玄様はなぜそう言い切れるんです？　それが仙人の境地というものなのですか？」

「私は達観しているわけではないよ。そうでなければこの世は成り立たないはずだ、という持論でそう思うだけだ」

この琥珀宮に拾われた私もまた、弱く迷う心のままに生きてきた。

だけど、それでもまだ信じているのだ。

絶望の先にはいつも、きつと希望があるのだ、と。

「娘々、これを預かっててくれ」

そう言って、常に傍らに置いていた聖魔剣を無造作に投げて寄越した緑麗はそのまま戦火に消えた。

それが、緑麗の姿を見た最後だった。

このとき、緑麗には大した意図はなかったように思う。ただ、黄龍召喚の大技を放つのに邪魔なので預かっていてくれ、という意味だったのかもしれない。

そうして、活路を開いた緑麗と私は、そのまま別行動を取るようになった。

私が数名の同志と共に帝都の繁華街に潜伏している間に、緑麗は帝都の北側の森から火雲宮に潜入する準備をしているはずだった。

それが最後の戦いになるのだ、と誰しもがそう思っていた。

しかし、特務（※特殊任務作戦部隊）の連中に捕まったとき、私はもう自分の命運は尽きた、と覚悟をした。

いつそ、傍らの兵士の剣でも奪って、ここで自刃すべきだったかもしれない。普通ならば地下の暗い牢獄にでも放り込まれるところを、私はどこかの小綺麗な一室に連れて行かれた。

そこで待っていたのは、背の高い、初めて見る男だった。

これが、敵の総大将か。名前は、九天応元雷声普化天尊。そして、恋人の謀叛を止めることのできなかった男、だ。

しかし、私は、朦朧とした頭で思った。

（ファン……、所詮、同じではないか。この男も、私も、緑麗を救えないし、止めることもできない……）

では、誰に『それ』ができるのだろう。

「緑麗はどこに居る？ ……と、聞いても答えぬだろうな」
彼の冷ややかな言葉が頭に響く。

私は自白剤を打たれていたが、ある程度の薬物には抵抗できる。

しばらくは、ギリギリの思考でこの男に対峙していた。

「一つ教えてやろう。貴女が黙秘を続ける限り、緑麗は苦悩し続ける」

「……どういう意味だ？」

「このバカげた闘いを終わらせたいのなら、俺の言うことを聞いた方がいいということだ。いま現在、飛び火している戦闘は、緑麗の思惑外で起こっているからな」

なんだ、この自信満々な物言いは……？ 緑麗のことなら分らないことはな

い、とでも言いたげだな。

緑麗、お前は、こういう自惚れ野郎が好きだったのか？ 趣味悪いぞ……。

「まだ抵抗できる、か。仙界の技術も伊達ではないな」

「貴方は、一体、なにを知っているのだ、九雷元帥——」

「そうだな。貴女が知りたいことの全てを知っているだろう、九天玄女殿」

「……」

やはりバレていたのか。

私の顔写真は天界軍部には出回っていないはずだが、西方軍の一部にはばれて

いるわけだし。

「崑崙の防衛隊長自らが将神の謀叛に参加するとはな。これが露見すれば、崑崙もさすがに終わりだ」

「……私に、緑麗を売れ、と言うのか」

「そう聞こえたか？」

「……」

「ならば、選んでくれ、九玄殿。貴女の賢明な判断で、無駄な犠牲も減るし、崑崙も助かるだろう」

最初は、ふざけるな、と思っていた。

私は緑麗を売ったりなどしない。

そんなことは、絶対にしない——、と。

しかし、私は更なる薬物を投与され、もう全ての抵抗力を奪われた。

「貴女が護りたいものは、武人としての誇りか？ それとも緑麗の志か？ もし緑麗のためだというなら、ここで黙秘を続けることは、決して緑麗のためにはならないぞ——」

そんな、九雷元帥の言葉だけは、忌々しいことに全て覚えている。

私が、次に目が覚めたのは金鑿斗闕で、そのときにはもう全てが終わっていた。

緑麗は玉座の間に辿り着く前に投降し、即日裁判にかけられ『処刑』された——という話を、他人事のように聞いた。

私が殺されなかったのは、竜吉公主が玉皇大帝に直談判をしたからだ。表向き公主には謝辞を述べたが、とてもそんな気分じゃなかった。

結局、天仙界の関係はなにも変わらず、緑麗が嘘のように居なくなっただけで一月もした頃、私は再度、何事もなかったかのように西王母様より崑崙防衛隊長の任を言い渡された。

「お断りします。私は天界に叛逆した身。今日は仙界をも追放されるつもりで参りました」

やつれた姿でも、キツパリ言った。

しかし、西王母様は表情ひとつ変えずに、「九玄。仙界は、無法の仙人たちが集う、最後の抛り所なのです。どんな汚名を着ても、ここを死守しなければ、我々に明日はありません」

そう言った。

「それが、沈黙を守り続けた盟主としての言い訳ですか?! 多くの仙道が死に無辜の民が死に、それを黙って見ていただけの盟主の命など、聞く謂れはありません!」

もうどうなっても構うもんか、という半ば自棄で、主君に噛み付いたのだ。

元より私がいま生きていることが間違っている。私はあの戦友と共に死すべきだったのだ。

「九玄、では、貴女の望む政治を私がしたとして、どうなったと思うのです?」

「……っ!？」

「我々は強大な力に踏みつぶされ、私も貴女も生きていないでしょう」

「……」

「悲しみに暮れているいまの貴女では、確かに公務は無理かもしれませぬ。ならば、一年でも二年でも、好きなだけ静養なさい」

西王母様がなぜ恭順したまま沈黙を守ったのか、分からないわけじゃない。しかし、私はそれを受け入れるには修行が足りなさ過ぎたのだ。

緑麗と出逢った場所に赴いて、私は泣き崩れた。

残された聖魔剣を握り締めて、いまの私に唯一許されているのは、この嗚咽を崑崙中に聞かせることなのだと思えた。

こんな後悔をするくらいなら、なぜ、私はあるとき、緑麗と共に滅びることを選ばなかったのだろうか。

汚名など、どうでもいい。

崑崙を売り渡した浅はかな女と後世まで語られたって、一向に構わなかったのに――。

緑麗――。

許されるのなら、もう一度、お前に会いたい。
そして、私を断罪してくれ。

三章 真武君との出逢い

1 黒帝玄武佑君

私はその頃、かなり自暴自棄で荒んだ生活をしていた。

全ての職務を放棄し、表向きは『静養』ということになっていたようだが、要するに、日々を酒と男で鬱々と紛らわしていただけの話だ。

勿論、燃燈はいい顔をせず、説教なのか励ましなのか分からぬような小言をたまに言いに来たが、それすらも鬱陶しかつた。

頼むから、しばらくは放っておいてくれ——。そう言ったのだが、この堅物には堅物なりの心配の仕方というものがあるようで、それを曲げる気はサラサラないようだった。

そして、私がいい加減、燃燈から逃げようとして、居を移そうかと考えていた頃、この旧友はいつもとは違う言葉を発した。

「玉泉山に少し風変わりな仙人が居るらしいぞ」

「……それがどうした。風変わりじゃない仙人の方が珍しいだろうに」

「まあ、そうだな」

「……で？ その珍しくもない仙人がどうしたというんだ？」

「会いに行ってみろ、ってことさ」

「……男は間に合ってるぞ」

そう言うのと、燃燈は苦笑した。

「そうじゃない。間者かもしれない、って話さ」

「今更、どこの間者が崑崙に用があるっていうんだ」

緑麗の処刑以来、崑崙の仙道たちも意気消沈している。

自堕落な生活を送っているのは、私だけじゃないだろう。

「さあな……。俺が見たところ、シロともクロとも言えないが……」

「私に情報局の連中の真似事でもしろ、と？」

「若い道士を骨抜きにしてるよりはいいかと思って」

などと、大真面目に言いやる。

全く、お前は風紀委員長か。

「……実はな、九玄。問題はその仙人よりも、むしろ客人の方でね」

「客人……？」

「天界を追われし神——だそうだぞ」

「……？」

その洞府に赴くとき、私は緑麗に託された聖魔剣を携えていくことにした。

この剣はかなり特殊で、通常は柄だけの形状になっている。五行のマイスターランクの力量がなければ起動もできず、実際、私には刃を出現させることはできなかった。

私にとっては役立たずのその剣をなぜ携行するのかと言えば、それは感傷であり、意地でもある。

崑崙の存続を実現してくれたのが誰なのかということ、せめて私一人だけでも忘れてはならないと思うからだ。

(玉泉山は、確か、玉鼎ぎょくていの山だったな)

この地方の山岳にしては、比較的傾斜の緩やかな玉泉山には、あの剣気鋭い仙人が居たはずだったが、ここ百年ほど見かけていないから、流浪の旅にでも出たかもしれない。

燃燈とは微妙に違う空気を持った堅物ではあるが、いまいちあの剣術バカとソリが合わないのは、仙人になったのは単なる剣術修業のついでだというあの姿勢のせいだろう。

だからなのか、この山には、不老長寿の手段として仙人になる者が多く集う。

玉鼎の、剣術を究めるため、という目的はそれなりに崇高なのだが、それを人の寿命の中で満足しないあたりが、貪欲すぎてついていけない。

「……？」

中腹あたりの山道に体格のよい男が一人、なにかを凝視するように佇んでいた。青鸞のスピードを落として、その男が見ているものを、私も遠くからその視線の先を追う。

彼の視線はやや下方の、山の麓あたりに向けられているようだが、私には『そ

れ』がなんなのか分からなかった。

「此の地一たび別れを為し、孤蓬万里に征く」(※李白『送友人』)

青鸞を寄せて近くに降りると、その男は誰に言うでもなくそう呟いた。

しかし、見渡す限り、他には誰も居ないのだから、恐らく、私に聞かせるために言ったのだらう。

だから、自然に聞いてみた。

「孤蓬(注1)は貴方か、それとも貴方の友か」

「……？」

すると、男は私が居ることにいま気付いた、とでも言わんばかりに振り向いて、

「ああ、そうだね。私ではないよ。恐らく、私の同胞のことだろう。と言って、惜別の念じゃないな。あの同胞ときたら、全く自分勝手な女だった」

「……」

それが誰のことを言っているのか直感で分かったものの、この男が誰か分からなかったので、慎重に観察した。

黒衣を纏ったその姿は官吏にも見えるし、一角の剣客にも見える。

しかし、この圧倒されるほどの光彩は、紛れもなく天界の住人のものであり、それも、一般市民などではないだろう。

「なにをご覧になっておられたのだ……？」

「いま言った同胞が作っていた『龍脈』を」

「……」

やはり、この男は緑麗の知り合いか、と思った。

「しかし、この乱雑さはなんとかならなかったのか。緻密に計算しろとは言わな
いが、これじゃ、美しさもへったくれもあつたもんじやない」

「緑麗に繊細さを求める方が間違っていると思うが……」

「君は、彼女を知っているのか」

「是」

「そうか。その聖魔剣はそういうことか」

と、彼は官帽のような黒い帽子を取って、それを優雅な手つきでゆっくりと投げ捨てた。

なぜそうしたのかは分からない。

しかし、彼にとつて、それは一つの儀式であるように思えた。

「私は黒帝玄武佑君。こくていげんぶゆうくん 黄龍を追う者だ」

それが真武君しんぶくんとの出逢いだった。

(注1) ……一株のヨモギのことだが、旅人にたとえられる。沙龍は『東京編』で

「根無し草」と訳した。

「いまこの地でひとたび別れてしまえば一本の蓬草のような孤独な君は、万里のかなたに旅立って返らない」という意味。(『李白詩選』岩波文庫)

2 奇妙な関係

思いもかけぬ形で四方将神の一人を匿うことになった仙界は、このVIPの扱いに窮した。

西王母様は、

「恐らく、真武君は天界を追われたというよりも、自ら出奔してきたのでしよう」

そう言っていた。

「なんのために？」

「さて……。それは貴女の腕次第といったところでしようかね、九玄。日頃の武器を置いて、貴女自身の武器である武神を籠絡してみるといのはどうですか？」

なにやら楽しそうに言う。

「なっ、なにを仰ってるんです!? 正気ですか!? 私はいまは謹慎同然の身ですが」

「勿論、正気です。修行中の道士を誑かして憂さを晴らすよりは、天界側の動向を探る方がよっぽど建設的だと思うのですが？」

「……」

バレてるし……。

燃燈め、チクツたな。

「あゝゝゝ、と、とにかく、様子は見てみることにします。私も少々気になるので……」

「宜しくね、九玄」

「……御意」

その日から、私の玉泉山通いが始まった。

それを燃燈に報告したとき、なぜか嬉しそうな顔をしていたのが癪に障った。

（行ってみてよかっただろ？）

と言ってるようで、確かに鬱々と日々を過ごしていた頃に比べれば、幾分マシにはなったのかもしれないが、私の心はこの聖魔剣を預かった日からちつとも晴れてなどいない。

玉泉山の洞府には、燃燈が言っていた通り、風変わりな仙人が住みついていて真武君はその一角に仮住まいをしていた。

仙人は清源妙道真君せいげんみょうどうしんくんと名乗った。玉鼎の弟子らしいが、はて、その玉鼎はこししばらく見ていないので、真偽は不明である。

仙人にしては珍しく愛想がよくて、却って不気味な感じがする。

真武君から緑麗の最期を聞かせて欲しいと言われ、話し込んでいたときも、なぜかこの仙人が同席していた。

「私は、緑麗の最期を見ていないんだ。戦場で生き別れたまま、この聖魔剣を預けられただけで……」

そう言うと、真武君が頷いた。

「そうか。元より死ぬ覚悟ではあったんだろうが……。その剣は少々特殊効果があつてね。大事に保管しておいてほしい」

「貴方は緑麗が決起した理由を知っているのか？ 緑麗にはなにか他意があつた気がするんだが、それを知っているのなら、教えて欲しい」

「……」

真武君は大きく息をついて、今度は首を横に振った。

「そばに居た我々ですら、それは聞かされていなかった。ただ、推測は色々できる。……しかし、その推測を語ったところで、貴女の憂いは晴れまい」

黒い瞳でまっすぐに見つめられる。

決して美形ではないのだが、惹きつけられるものがあつた。

「決起の理由？ 玉帝と仲が悪かつたって話ですよ？ それ以外になんの理由があるというんです？」

この庵の住人が口を挟んだ。なぜかイラつとする。

てめーの意見なんざ、どうでもいいんだよ、黙ってる、ダアホ。

「仲が悪いというのは単なる状態の説明であつて、原因にも理由にもならないだろう。緑麗の場合は心裡留保といつて、本意は別にあると考えられるのだがその証拠に……」

真武君が諭すように言う。

彼のインテリぶりは、こういう要所要所で発揮される。

それは、いつも清源妙道真武君を黙らせていたが、実のところ、この仙人も真武

君のこの理屈っぽいところに辟易していたんじゃないかとも思う。

「……あ、お茶を淹れました。九玄殿もどうですか？」

「いや、私はこれで失礼する。真武君、なにか不便があったら言って欲しい。出来る限りの助力はしよう」

「ありがとう。真君に迷惑をかけたくないので、出来れば寝泊りする場所くらいは自分で作ろうと思ってます。大工道具一式を拝借できますか？」

「はあ……、分かりました」

変わってる……。

この四方将神は限りなく変わってる……。

理屈魔かと思えば、日曜大工をニコニコしながらやって、簡素ながらも一棟の建物を建ててしまった。

私はというと、なんとなくこの変わり者から目が離せなくなり、生まれて初めて、誰かの世話を甲斐甲斐しく焼くという、凡そ自分らしくない数ヶ月を過ごしてしまった。

どこが、とか、なにが、と言うのではなく、ただ自然に、そうなったのだ。

強烈に一目惚れしたとか、劇的な一夜があつたとか、そういったものはなにもなく、家族に近い感情で、自分がこの四方将神の隣に居ることがとても自然に思えた。

「本名は——という。できれば、そう呼んでくれ」

一度そう言ったはずなのに、真武君はいつも私を『九玄殿』と、他人行儀に呼んだ。

それは夜の褥しとねでも変わらず、妙な性癖も特にないこの男は、ごく普通に、恐らくはこれが標準仕様なんだろうと思えるような抱き方で、私を抱いた。

しかし、私にとって、それは実は初めてのことだった。

「君を下にできる男が現れたら——」

以前、西海龍王がそんなことを言っていたっけ。

あの愛の狩人はそれこそ色んな経験の元に色んなプレイのできる人ではあつたが、恐らく、ちゃんと標準仕様も知っていて、それこそが自然体なのだというこ

とを言いたかったのではないか。

だとすれば、私はかなり屈折していたということになるが、それも、あの龍王曰く『屈折してない人も結構珍しい』ということなので、深くは考えるまい。

(今日は半月、か)

天文学が専門だと言っていた真武君は、自分の仮住まいに天窓を作っていた。この人に抱かれるときにいつも見える夜空は、彼のロマंचイズムなのか、それとも、リアリズムなのか、聞いてみたことがある。

「どちらにも正解だね。学問は、浪漫であり、現実だよ」

「フフ……、貴方でも、戦場を駆るときがあつたのが少し信じられない……」

「おや、心外だね。これでも『最強の武神』と言われていたんだよ。……と言つても、皆、敖広ごうこうの前では遠慮して言わないようにしていたみたいだけど」

敖広——、青帝青龍せいせいりゆう広君 のことである。

最強の将神といわれた緑麗、その緑麗とほぼ同格の力を持っていたとされる敖広。そんな彼らと肩を並べるほどの力を持っていたこの人が、いまはその地位も力も全て捨て、ここにこうしているのが、不思議な気がする。

「敖広も、ひとりで逝ってしまったけどね」

彼は亡くした同僚たちを偲んではいたが、悲しみに暮れてはいなかった。

「我々四方将神もバラバラになってしまったよ。それぞれの主義主張を重んじた結果がこうなるとは、なんとも皮肉なものだね」

なぜなら、真武君には明確にやるべき仕事があったのだ。

だから、彼はここに来て、ここに居るのである。

最初に会ったときに、真武君はこう言ったではないか。

「黄龍を追う者」

と――。

その言葉の意味するところを知ることにつれて、私はだんだん無口になっていった。

「緑麗のことは最後まで分からなかったよ。彼女のことを一番理解していたのは恐らく、陽輝大将だろうね」

龍脈の修正をする真武君について回りながら、時々そんな話を聞いた。

「九雷元帥ではなく？」

「そう。緑麗の不幸は、理解者が情人ではなく、戦友だったことかもしれない」
男女の情が絡むと見えなくなるものがあるのはなんとなく分かる。

「では、貴方の理解者は？」

そう聞いてみた。

「私？ そうだな……、理解というのが思考を、と限定するなら、やはりあの三人だろう」

「貴方以外の四方将神？」

「そう。私たちは自分のことのようにお互いが分かる。それを嫌がって白帝君な

んかはいつもブロックしていたけどね。いまも彼は恣意的に思考を閉ざしているよ」

「白虎聖君は殺されたと聞いたが？」

「いや、死んでないよ。……まあ、世間的に殺されたってことにはなるけど」

「……？」

「多分、彼にはこの先の取るべき道が見えているんだろう。一番若いくせに大したもんだ。私など未だに迷っているというのに」

「迷っておられるのか。しかし、あなたにも既に進む道が見えているのだから？」

「そうだね……」

そう言ったきり、黙ってしまった真武君の横顔が、ふと、火雲宮の戦火に消えたあの子の緑麗の表情と重なった。

「……」

言葉に詰まって、なにも聞けなくなった。

だから、関係のないことを色々と話した。

遙か南方でしか見えない星座のこと、滋養強壯にいいという乾元山の温泉は実は水道水であること、帝都で流行っていたという遊びの話——、そんな他愛のない会話を穏やかに交わしながら、私はいつか来る別れの時をできるだけ引き伸ばしていた。

「太乙、^{たいいつ}たいむましくんとやらを作れたら、お前の会いたがっているリトルグレイとやらを百人くらい連れてきてやるぞ」

同期入山した旧友を訪ねて、そんな出来もしないことを言ってみた。

科学にしか興味のないという変人だが、十二仙の中では実は一番まともだ。

「なに？ 昔に戻りたいの？ ダイジョブ、九玄はまだ充分キレイ——、ホゲツ！」

とりあえず、五トンハンマーで殴っておいた。

「私が言っているのはそういうことではない！」

「分かってるって……。やり直したい過去でもあるの？」

「……」

「理論上、それが出来たとしても、いまとは別の未来になってしまいうけどね。それでもやり直したい？」

「いや、いいんだ。戯言だ。聞き流してくれ」

例え、緑麗と出逢った直後まで時間を遡れたとしても、私は同じ選択しかできないのではないかと思った。

ならば、『出逢わない人生』を選ぶか？

そうして、私はあの友に逢わないまま、なにも知らず、なにも起こらない崑崙で、平和に暮らすのか……？

そんなのは、嫌だ。

「九玄がいつも言ってたじゃない？ 絶望の先に絶望しかないんだとしたら、この世はとっくに滅んでなくなってる、って」

「そうだな……」

「僕にとって、結構その言葉は救いなんだ。哪咤なたは決して僕を許してくれないだろうけど、いつかあの悪夢もただの歴史となつて、誰かが僕の罪を許してくれる

かもしれない——ってね」

「太乙……」

天界に献上され、東海龍王家の罾にはまって殺された哪咤太子の件は、仙界ではタブーになっている。特に、生みの親である太乙の前では誰もその話をしない。

あの悲劇も太乙の中ではまだ思い出にはなっていないのだろう。

「だから、九玄もそんな悲観的にならないで、皺なんて美容整形でなんとでも——、ホガッ！」

とりあえず十トンハンマーで殴っておいた。

「邪魔したな、次に会うのは十年後か百年後か分かんが、身体は大事にしるよ」

「うん、九玄もね」

4 七星剣と共に

久しぶりに西華^{せいかに}の桃園を訪れたら、いつの間にか桃の花が満開だった。

甘い香りの満ちたこの楽園は、訪れる者の心を和ませてくれる。

昔は、ここで華やかな宴を開いて、笑い合っている紳士淑女のお歴々に対して「ケツ」と思っていたものだが、いまの私にはこういう風景も必要なのかもしれない。

「この桃園は、最初は一本の苗だったのです。ここまで大きくするつもりはなかったのだけど、自然の力は侮れないわね」

西王母様は、この桃園で大々的な宴を企画している、と語った。

「その案には全面的に賛成致します」

「そう言ってくれると思ったわ。無力な盟主といえどなにかできることがあって私も喜んでいるのですよ。竜吉は相変わらず酒浸りの生活のようで、困ったものだけど……」

「はあ……」

しかし、あの公主の凄いところは、ご機嫌伺いに来る火雲宮の官吏や、求婚者たちの前では、ビシッと取り繕えるという所なわけで……。

「それで、真武君の方は？」

「恐らく、私の読んだところ、地上へ転生するつもりなのは、と……」

「潔いこと。いまの自分の肉体にも魂にも、未練はないということかしら」

「もし、かの四方将神がそう願い出れば、西王母様はどうなさるおつもりで？」

「それが彼の望みならば、叶えるのが道理かと」

「……御意」

天界の神々がもし地上に転生を望むのなら、泰山府君の力を借りれば済むことだ。

しかし、四方将神たちは、今、天界での立ち位置が微妙なので、真武君は崑崙に来たのだ。

そう、ここには、泰山府君と同じことができる西王母様が居るから、である。

真武君がなにをしに崑崙にやって来たのかといえば、それしかない。

彼の心は、常に『黄龍』と共にあるのだという。

最初に会ったとき、自分のことを『黄龍を追う者』と言っていたではないか。しかし、ならば、私はまた一つ、大切なものを失うことになる。

「仕事と言い切ってしまうと、それしか頭のない奴だと思われそうだから、つまり、両方だということにしておくよ」

真武君はそう言った。

「つまり、貴方のロマンチズムとリアリズム？」

「そうだね」

「……」

「緑麗は、自分の身を呈して、黄龍と共に地上へ行った。同じことができなければ、私に黄龍を執行する資格はないんだ」

「『執行』？」

「そう。あの力は強大だ。しかし、だからこそ、調整し、御す者たちが必要にな

る。我々が一時的に黄龍を凌ぐ力を發揮できるのはそのためなのだ。私の力はその中でも一番過酷な役割を持っている。そして、そのために常に黄龍の傍らにあらうとする」

「……」

「そんな顔をしないで。私はなにも自分を不幸だとは思っていないし、この境遇を恨んでも嘆いてもいない」

「違う。貴方は、私の選択次第では、黄龍を失わずに済んだ——」

「……?」

罪を犯した者がなにに苦しむのか、と言えば、犯したことに対する後悔ではなく、こんな風に、自分のしたことの影響力をすっかり見ろ、と現実を目の前に突きつけられることなのかもしれない。

だから、私はこの四方将神に懺悔をした。それで許されたいと思ったわけじゃない。

私は、この許されない罪を、彼に裁いて欲しかった。そして、その手で殺されたかったんだろう。

「そこまで自分を追い詰める必要はないよ」

真武君は呆れた顔で私の頬を撫でた。

「しかし、貴方が黄龍を失う原因の一つを作ったのは、間違いなく私だ」

「どこをどうしたらそういう論理展開になるのか、不思議でしょうがないな。：

…ああ、成程」

と、彼はさもおかしそうに微笑む。

「人は、得てしてその性質が昼と夜では逆になるという。君は昼間はひどく内省的な分、夜に豹変するわけか」

「……」

「私はどちらも好きだけどね」

やがて迎えた最後の日、

「」

この四方将神がその名を呼んでくれたのは、後にも先にもこの時だけだった。

「これを預けていく。君の好きに使ってくれ。捨ててくれてもいい」
黒塗りの鞘に、北斗七星の意匠が施された剣だ。

「あなたたちはそうやって、私を残して行ってしまうのか。緑麗も、貴方も、勝手過ぎるぞ……」

渡された七星剣を抱きしめるようにして、泣いた。

何度こんな涙を流せばいいのか。

別れの言葉も抱擁も、昨夜貰ったはずだったが、それだけでこの先、何千年と耐えられるはずはない。

「早く行ってくれ、私の気が変わらないうちに……」

「再見」

もう、涙でなにも見えなかったし、見たくもなかった。

5 絶望の果て

「キューゲン……、起きぬか……、これ……」

かわいらしい声と共に、ペタペタとする感触がして、ふと目を覚ました。見れば、小さな手で私の頬を叩いている幼女が一人。

「り……、梨蘭様リーランっ？」

途端に、ガバッと身体を起こした。

昨日は久しぶりに深酒したもんだから、この陽気の中、寝こけてしまったようだ。崑崙防衛庁、中庭の芝生の上で。

「心配したぞ。声を掛けても目を覚まさないのぞな」

「も、申し訳ありません」

あり？　しかし、なんで梨蘭様がここに——？　と思ったら、すぐに別の声が掛かった。

「なんだ、やっぱここか」

意外な人が意外な場所に居る。どういうことだ？

「陽輝大将……、なぜ貴方がここに？」

「いやあ、リーランが居なくなっただって沙龍が大騒ぎするもんだからよ。今日は総出で捜索に借り出されちゃった」

「伯母上など、もう知らん！ わらわは、水雲宮には絶対戻らんぞ！」

と、私の袖を握り締め、意思表示をする五歳児は、普段は伯母である沙龍と共に、帝都の水雲宮で暮らしている。

崑崙の清林山で暮らす実母とはあまり一緒に居られない事情があつてのことなのだが、たまに母親恋しさからか、一人で戻ってきたりする。

その恐るべき行動力は、百パーセント父親譲りだと思うが、我俣お嬢っぷりはやはり間違はなく母親譲りだろう。

今日は、沙龍と喧嘩した挙句の家出のようだ。

「伯母上は味覚がおかし過ぎるのじゃ！ そもそも……」

「九玄姐さん、大丈夫か？ 寝惚けてんのか？」

陽輝大将は次期西王母様のお言葉はひとつも聞いちやいない。梨蘭様の襟首掴

んで、横にどけると、私の顔を覗き込んだ。

「え？ ……あ？ ……なんか、おかしいか？」

「おかしいってどうか、目がどつか飛んでるってどうか……」

「こらっ！ 陽兄！ ジョージの相手にもならぬわらわよりも、だいなまいつな九玄の方がいいのは分かるが、この扱いは未来の『イイ女』に対して失礼ではないか!! 目先の利益に捉われていると——」

恐らく言っていることの半分も理解していない梨蘭様が、陽輝大将の伸ばした手の下にぶら下がったままジタバタしている。

「ちよつとな……、大昔の夢を見ていたようだ」

「……イイ夢だったかい？」

「そうだな……。イイ夢も悪い夢も、半々ってところか……」

「願わくば、俺に口説かれた頃の夢も入ってるといいんだが」

「勝手に過去を作るな。口説かれた覚えなど、一切ないが？」

「あれ？ そうだったっけか？ じゃあ、今度、うるさいのが居ないときにでも

……」

「聞いておるのか、陽兄！ ……ンムっ!？」

ジタバタしていた梨蘭様の身体が、更に誰かに高々と摘み上げられたようだ。「目標物発見。第一発見者は私用に職務放棄中につき報告は黒帝玄武佑君から。 ……繰り返す、目標物発見」

前世の姿をちつとも彷彿させない、逆光を浴びた美しき四方将神が、梨蘭様を片手に、どこかと連絡を取り合っていた。

「真武君 ……、貴方までもか ……」

「すみません、九玄さん。勝手に敷地内に入り込んで。すぐに退散しますから」

「いや、それは構わんのだが ……」

一応、この中庭はオープンになってるし。

「コ、コラア——ッ！ わらわは荷物ではないと言うのに！ 玄武佑君、貴様！ 今日という今日はガマンできぬ！ 無礼討ちにしてくれる！」

「そういうセリフは実力が伴っていないと説得力がないということを知るべきだな。とつとつと水雲宮に戻るぞ」

「陽兄、九玄——！ 助ける——！ こいつは嫌じゃ！」

梨蘭様は半泣きになってわめいている。

「引取り人を選び好みしてる場合か？ 君は今日の僕の仕事を全て台無しにしてくれたんだ。それなりの償いはして貰う」

対して、真武君はどこまでも冷ややかだ。

「助けろって言ってもなあ、リーラン。真武君よりツワモノっていったら、お前のオバサンくらいのもんだぜ？」

と、陽輝大将が言ったそばから、頭上に蹴りが入った。

「オバサン、言うなあああああああ!!」

「ぐはっ」

「馨、早かったな」

やっとなり御大登場だ。

「おうよ！ このハタ迷惑な家出姪っ子に、世間の厳しさちゅーもんを今日こそ叩き込まないと、私は吉羅公主に顔向けできん！」

「伯母上！ わらわはもう激辛アンパンドの、芥子ジャムだの、は御免なの

じゃ！ 水雲宮には戻らぬ！ 連れ戻そうとしても無駄じゃ！」

「扶養家族のくせに、沙龍スペシャル朝食メニューにケチつけてんじやねーぞ、お前は」

「いや……、沙龍……、そのラインアップは俺も遠慮したい……」

沙龍の登場でいきなり騒がしくなったものの、私はまだ夢見心地だったので、そのままその風景を眺めていた。

「娘々？ どしたん……？」

さっきの陽輝大将のような口調と手振りで、沙龍が私の顔を覗き込んできた。

「いや……、長く生きてみるもんだな、と思ってたところさ……」

「……？」

『娘々、私は負ける鬨いはしないぞ。将神だからな』

ああ、そうだな、緑麗。

結局、お前の一人勝ちさ——。

END

